

神様転生！ 行く世界は…え？デビサバ？

マルク マーク

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

神様達のせいで死んでしまった 間糺 真 (まなき しん)

まあ別に 未練とかはないからいいけど、でもお詫びに転生させてくれるらしいし で転生する世界は？ …え？デビサバ？

この話は彼が悪夢の7日間を生き抜く話

## 注意事項

- 1 処女作です
- 2 作者は日本語めっちゃヘタです
- 3 グダグダ展開
- 4 かなり投稿速度が遅いと思います  
それらが嫌な人はブラウザバックしてください

# 目次

プロローグ	1
キャラ設定	6
原作前	
第1話	12
第2話	15
第3話	18
第4話	21
第5話	24
第6話	27
第7話	30
第8話	33
第9話	37
第10話	41
第11話	46
第12話	50
第13話	52
第14話	55
原作開始	
DAY BEFORE DAY 日常の終焉(非日常の始まり)	1
DAY BEFORE DAY 日常の終焉(非日常の始まり)	2
1st DAY 東京封鎖(2つの顔)	1
1st DAY 東京封鎖(2つの顔)	2
1st DAY 東京封鎖(2つの顔)	3
	82
	77
	74
	65
	58
	55
	52
	50
	46
	41
	37
	33
	30
	27
	24
	21
	18
	15
	12
	6
	1

2ND DAY	2ND DAY	2ND DAY	番外編 未来の可能性の一つ「クリスマス」
出口を求めて（人脈を求めて）	出口を求めて（人脈を求めて）	出口を求めて（人脈を求めて）	———
3	2	1	———
103	99	96	92

## プロローグ

今は8月半ば 夏真っ盛り

俺こと 間薙 真 は

「あと少し！ 削り取れ！…ちくしょう！少し足りねえ！」

デビルサバイバーOCの裏ボスのルシファーと戦っていた。

「あ、閣下待つて！ お願い5回目のメギドラダインは待つてくれ！

」

「あつ…」

FATAL KERNEL ERROR

mind link to COMP Disconnect

「ああ…あと少しで89レベルで閣下を倒せそうだったのに…」

最近可能な限りレベルを抑えてルシファーと戦うという事をやっている。

「一応中断セーブはしてつけどさすがに疲れた。ちよつとコンビニ行くか」

彼が外に出た瞬間、外の熱気が伝わってきた。

「うわ、アツチイ デビサバの主人公達、よくこんな暑い中あんだけ動きまわれるよな。俺はできねえわけじゃないけど、やりたかねえよ。」

コンビニは、彼の家からそう遠くない所にある。

「ん、 やっぱり80番台で閣下と戦うのは無謀か？ でもあと少しだったし、頑張ればいけるか？」

彼はそんな事を考えながら横断歩道を渡つてていた。

「おい！危ないぞ！」

そんな声が聞こえてきた。

信号無視のトラックが突っ込んできたのだ。

「あつぶね！」

彼はとっさにバックステップでかわした。

いつ非日常的な事が起こっても大丈夫なように、普段から鍛えていたのだが…

ドン 「え？」

彼を助けようと突き飛ばした男がいた。

だがそれは最悪の行動だった。彼を突き飛ばしてしまい、トラックの前まで押し戻してしまったのだ。

グシヤ、と言う音を聞いた瞬間、彼は意識を失ったのだった。

次に彼が目覚めたのは

ボクシングのスタジアムだった。

「いやーおかしいだろ!! こういうのは真っ白な空間とかだろ! どうしてボクシングのスタジアムなんだよ!？」

そこには、一目見たら絶対に通報されそうな顔の男と長い白ひげの爺さんがスパarringしていた。

「(。D。)」

「お、もう起きたのか。少し待つとれ。

今、終わらせるからの。」

そう言いながら、爺さんがスパarringをやめ、こっちに来た。

(ちなみに悪人ヅラのおっさんは、霧のようになって消えていった)

「すまんの。お主がなかなか起きないから、ちよいと暇を潰していたのじゃ。」

「アッハイ」

「ふむ、では話をしよう。」

「あ、ちよつと待っててください。

今、ちよつと混乱しちゃて、少し待ってくれませんか？」

「まあ、いいじやろう。お主も突然こんなところに連れてこられたからの。少し待ってやろう。」

10分程経過

「Ok もう大丈夫だ 問題ない」

「では 自己紹介をしようかの わしは神じゃ」

「まあ なんとなくわかります」

彼はちよつとしたオタクであり、様々な小説やライトノベルなどを読んでおり、この状況が所謂神様転生だと把握した。

「じゃあやつぱり俺って死んだんですね。」

「案外あっさりしてるの!? もっと騒ぎ立てると思ってたわい。」

「特に未練とかあったわけじゃないですし。家族も、もう誰もいませんしね」

「そうか、だが今回の死はこちら側の不手際じゃから、お主には転生して欲しいのじゃ。」

「いいですよ。」

「だから、お主はあっさりしすぎじゃー!」

「まあまあ別にいいじゃないですか。こっちの方がいろいろ楽ですし」

「う、うむ まあそうかの…では特典を三つやろう。好きに選ぶといい。」

「そういえば、行く世界聞いてないんですけど、何の世界ですか?」

「それは…」

「それは?」

「わしにもわからん。」

「わからねえのかよ!?!」

「だってランダムなんじゃもん。」

「じゃもんってなんだよ! 気色悪いわ!」

「そつちが素かの?」

「あつ…すみません取り乱しました。」

「別に素でも構わんのじゃがのう。」

「一応神様ですし。」

「まあいいかの。で特典の話じゃが、行く世界はわからんが、アトラス

の女神転生シリーズの世界なのは確かじゃ。」

「なんでそこだけ分かるんですか？」

「勘じゃ」

「勘かよ！ ハア もういいです。女神転生シリーズって分かった時点で特典は決めました。」

「そうかそうか。では教えてくれ。」

「じゃあ。1つ目は、混沌王 人修羅が使用可能なスキルが全て使えるようにしてください。2つ目は、スキル使用時のコストをゼロにしてくれ。3つ目は、俺専用の悪魔をくれ。」

「もう敬語じゃなくなつとるの…」

「こつちの方が楽だからな。」

「まあ別に良いが、でお主の専用悪魔とな？」

「ああ、アスクレピオスって言うギリシャ神話の医術の神だ。神話道理の神、いや悪魔にできないか？」

「別に構わんよ。」

「よし！ この3つが俺が望む特典だ。」

「ではもう特典も選んだし、転生するかの」

「もう お別れか…」

「そうじゃのう…」

「じゃ最後に一つだけ。」

「なんじゃ。」

「俺はどうして死んだんだ？」

「そういえば言ってなかったのう。」

「ああ、だから教えてくれ。」

「そうじゃのう、実は最近ボクシングにハマってのう。」

「まあ、俺が起きるまでスパarringしてたくらいだからな。」

「それで今日はボクシングの試合にでてたのじゃが、その試合中でわしが気絶しての。」

「おい！大丈夫だったのか！その時！」

「大丈夫じゃ、試合には勝ったからの。」

「そこじゃねえよ！」

「まあ気絶したんじやが、その時部下の一人が仕事そっちのけにして、こっちにきての。」

「もしかして、その仕事って…」

「余命管理じや。」

「アンタの部下は阿保なのか!?!」

「まあ大体終わって、残ったの一枚だけだから、問題ないと思っただけじやろう。」

「問題ないってどういうことだ?」

「本来なら少しほっといただけで死にはせん」

「じやあなんで、俺は死んだんだ?」

「別の部下がゴミと思って捨てたらしい。」

「ええ…」

「まあこれで おしまいじや。」

神がそう言った瞬間、神の側に扉が現れた。

「さて、この扉を潜ればお主は転生する。」

「そっか、ありがとうな神様。」

「なに、こちらに非があるのじやから当然の事をしたまでじや」

「アンタと話すの楽しかったぜ。」

「わしもじや。」

「じやあな。」

彼はそう言いながら、扉を潜っていった。

「じやあの。」

神はそう言いながら、光輝きその場を去った。

その場に残ったのは 静寂と…

神が使っていたグローブのみ

数十分後神が忘れ物に気がいて取りに来るのは別の話。

## キャラ設定

名前：間薙 真（マナギ シン）

年齢：16歳

趣味：ゲーム トレーニング

詳細

どこにでもいる普通の高校生 見た目は人修羅そっくりの為クラスメイトからはよく人修羅 や 混沌王 とか呼ばれていた 彼自身も人修羅が好きなためそう呼ばれて悪い気はしないらしい、彼の家族は父 母 妹 がいたが彼が中学2年の時に事故死 その時彼は風邪で家にいた。その後彼は保険金とバイトをしながら高校に通っていた。 夏休みの間 デビサバの縛りプレイをしていた、そして休憩のためコンビニに行ってる間にトラックに轢かれて死亡した

選んだ特典

- 1 混沌王 人修羅のスキル
- 2 スキル使用時のコストをゼロにする
- 3 オリジナル悪魔 アスクレピオス

1と2の特典を合わせれば 地母の晚餐を撃ち放題なども可能（これだけで十分チート）

間薙 真のステータス

人修羅 間薙 真 L.V. 255

力 40

魔 40

体 40

速 40

物 |

火 |

氷 |

風 |

雷 ー  
 魔 ー  
 スキル 人修羅 ー ー ー  
 魔人化 ノーコスト 死兆石  
 混沌王  
 人修羅  
 混沌王 人修羅が使用可能なスキル全てがこのスキルに収まっ  
 ている（クラック不可）

魔人化  
 魔人化中万能属性以外の全ての攻撃を無効にする（銃属性も無効）  
 （クラック不可）

ノーコスト  
 全てのスキルの使用コストをゼロにする（クラック不可）

死兆石  
 いくつかのスキルが変化する（MUGEN使用）（クラック不可）

混沌王  
 かつて全てのコトワリを退け YHVHを打ち破った者  
 既にその力の一端を使用している その真の力を使うには…

アスクレピオスのステータス  
 耐性 物 炎 氷 風 雷

弱 ー  
 耐 無  
 反 吸

力 15  
 魔 40  
 体 28

速30

スキル 常世の祈り サマリカーム 万魔の乱舞

勝利の雄叫び 勝利の美酒 勝

利のチャクラ

医神

\*医神 : 味方全体(NPC含む)に「医神の医術」を使用できる

医神の医術:HP&MPを1/3回復する そして死亡した味方がいた場合 HP1/3で復活する

アスクレピオスについて

アスクレピオスはアポロンとコロニスの子

ケイローンのもとで育ったアスクレピオスは、とくに医学に才能を示し、師のケイローンさえ凌ぐほどであった。

アテーナーから授かったメドゥーサの右側の血管から流れた蘇生作用のある血を使い、ついに死者まで生き返らせることができるようになった。

ゼウスは人間が治療の術を獲得して互いに助け合いをすることをよしとしなかったため、雷霆をもってアスクレピオスを撃ち殺した、だがアスクレピオスは功績を認められ、死後天に上げられてへびつかい座となり、神の一員に加わえられることとなった。 by

wiki

シンの仲魔

幻魔 ヨシツネLv99

力40

魔15

体25

速40

物無

火耐

氷 |  
風 |  
雷 無  
魔 耐

八艘跳び

チャージ

会心の予言

物理激化

猛反撃

双手

夢幻の具足

・「双手」通常攻撃が二回になる

魔人 アリスLv99

力 26

魔 35

体 27

速 27

物 1

火 耐

氷 耐

風 耐

雷 耐

魔 無

死んでくれる？

吸魔

ライフドレイン

至高の魔銃

双手

耐万能

異界の住人

- ・ 「至高の魔銃」 通常攻撃が万能属性になる
- ・ 「死んでくれる？」 ∴現在HP・MPの100%ダメージの万能属性全体攻撃。
- ・ 「ライフレイン」 ∴範囲内のチーム全員に万能ダメージを与えてHPを吸収する。
- ・ 「異界の住民」 もう一度行動可能

妖精 ピクシーLv99

力21

魔40

体38

速40

メギドラオン

吸魔

常世の祈り

物理吸収

全問耐性

勝利の雄叫び

おまじない

神様

名前：特にない

趣味：ボクシング

繊細

シンを殺してしまった部下の上司 一応根本的な理由が自分にあるため シンを転生させた 部下が少し過保護すぎて怖いらしい。あと最近仕事が減って少し暇になってしまい

ボクシングを始めたら楽しくてハマったらしい、本来余命管理も彼

の仕事なのだが部下に押し付けてボクシングの試合にでた

顔の怖いおっさん

繊細

神様が作り出した存在 マネカタや イゴールのような存在

ボクシングの相手の為だけに作られた為喋ったり 表情を動かす  
ことはできない

ステータスやスキル編成が適当なためこうした方が良いよと言う  
コメントなどを送ってください

## 原作前 第1話

「そして俺は転生した」

「シン君 どうしたの？」

「んくん なんでもない」

俺は転生した。だが赤ん坊からではなく小学校に行く一週間前に前世の記憶を思い出した。さすがに赤ん坊から始めてもなんにも出来なからな。それに恥ずかしいしな。ここは神様に感謝だ。

「今日の夜ご飯なくに〜」

「夜ご飯はハンバーグよ」

「やった！」

何故こんな口調で話しているかと言うと。急に口調を変えると親が変に思われるかもしれないからだ。小学校に入学したら口調は元に戻すつもりだ。

「シンくん ご飯出来たよ〜」

「は〜い」

「だけどまた家族に会えるとは思ってなかったな。だけど…」

「はい。じゃあいただきます」

「いただきます〜す」

家族が前世と色々違うな。

俺の前世の家族構成は。父。母。俺そして妹の四人家族だった。だが今世の俺の家族は父。母そして俺の三人家族になっていた。そして前世の父は普通のサラリーマンだったが今世の父はちよつと有名なIT企業の社長で家に帰ってくるのはかなり遅いし。朝も早く起きて家を出ていってしまう。そして妹については父が忙しいから母とやってないからだろう、まあ俺の家族の事は今はいいか。

とりあえず今後の行動指針を考えなきゃいけないな。

原作に加入するかしないか

加入するか

あつさり決めたがよく考えてみたら加入しないと俺が納得しないからな　よく考えて欲しい　自分が知らない所で世界がロウやカオスになったら　どう思う？　そしてせっかく特典で力をもらったんだからその力を使いたいだろう？

そういえば力については前世の記憶が戻った時に使い方も一緒に頭に浮かんできたさすがに練習はできないからな　この力は　悪魔はまだきてない　多分召喚可能になったら出てくるだろう

あとは原作についてはまだ何の世界かは分かかっていない小学校に入学したら色々探ってみるつもりだ

とりあえず今後の行動指針は

- 1　なんの世界かの把握
  - 2　原作キャラとの接触
  - 3　原作主人公との接触
  - 4　原作への加入
- この4つだ

まあでも今は

「ごちそうさまでした」

「はい、お粗末さまでした」

「ねえねえ、お母さん　テレビつけてもいい？」

「いいよ〜」

もう少しこの生活を楽しんでからでもいいよな？

小学校入学当日

人生二回目の小学校入学式は特に何もなかった。

そして半分寝てたから校長の話は聞いてない　クラスメイトも見  
てない　まあ後で紹介されるだろうしいいか。

そしてクラスに入って適当に席を選んで座ったらとなりの席に誰  
かが座ったまあ特に興味もないし…この時はそう思ってたんだが  
なあ

紹介の時に適当に自己紹介してから少したつたあと　隣の奴の自  
己紹介になったのだ

「次、九頭竜」

ん？九頭竜？

「はい」

あれ？こいつ〇〇〇〇に似てね？

「九頭竜　天音（くずりゆう　あまね）です」

…アマネがいるって事はこの世界って…

デビルサバイバーですか？

## 第2話

昼休み

どう接触するればいいんだろう…

どうも 間薙 真です 只今アマネとの接触方法を考え中です  
いや、確かに前は原作キャラと接触するって言ったけど

こんなすぐに会えるとは思わないじゃん てつきり中学あたりで  
会うと思ってたのに…しばらくこの世界の神話をあさるつもりだっ  
たが予定変更だ

アマネの（友人になるための）攻略が先だ

ただかなり話をかけずれえ なんだよこの年からもう無表情なの  
かよ なんでももう敬語なんだよ

あんなん話しかけずれえわ！

とりあえず話をしてみよう そっから考えよう

「はじめまして、えっと アマネちゃん」

「私に何か御用でしょうか 間薙さん」

「シンでいいよ これから1年間同じクラスなんだから」

「ではシンさんと」

「うん、それでいいよ 俺はアマネって呼ぶから」

「構いませんよ」

よし！ 第一関門 名前を呼び合う を突破！

「それで何か御用でしょうか」

「となりの席にいるから 挨拶でもしようと思って」

「そうですか」

「・・・」

「・・・」

は、話が續かねえ… な、何か話題は… そうだ！

「なあ」

「なんででしょうか？」

「俺の友達になつてくれないか？」

「何故 私なのででしょうか？」

そこはうん！ とか はい！でいいだろ！

「その、俺友達が居なくて…」

そう 俺は転生してから友人と呼べるものは一人もいないのだ

「なら 何故私を？ もっと他にふさわしい方がいるのでは？」

ガード硬いなオイ

「他の奴らは大体元からいる友達と一緒にいるから、その中に入りにくいんだよ」

「そうですか…ですが…」

父親辺りに言われてんのか？ 友人は作るなどか、もう巫女としての教育は初めてるだろうし …なら

「俺と友達になるのは嫌か？」

「いえ、別にそういうわけでは…」

「なら、いいじゃないか」

「ですが お父様が…」

やっぱりか…

「じゃあ アマネの父親に合わせてくれよ」

「えっ!？」

おっ 初めて表情が変わった

「明日の朝に返事 聞くから 父親に聞いといてくれ」

「あの…!？」

「もう昼休みが終わるな じゃあ返事期待してる」

よし、これで相手の返事次第で今後の行動の仕方が色々変わるな

一応保険をつけとくか…

放課後

「じゃあな、アマネ父親に言つといてくれよ」

「…分かりました」

「そうだ アマネの父親当てに手紙を書いたから渡しといてくれ」

「はい、わかりました」

「じゃあなー」

これで相手も少しは俺に興味を持つだろう

家についた

さて少し力の訓練をするか 本来人修羅のスキルは危険な物が多いがそれは「専用」スキルだ、だが俺の特典は 人修羅の「使用可能」スキル、つまりディア系やカジャ系なども使用可能だ

簡単に言えば 自分を傷つける↓ディアで回復する この訓練の意味は痛みに耐えながら魔法を使うことと魔法に使いなれるための訓練だ

ちなみに両親は共働きの為家には俺一人だ

他には人修羅が使っていた死亡遊戯やヒートウェーブなどで出しているエネルギーの剣 を手にだして長時間展開するなどもやっている今は最高10秒展開できるようになった

目標は5〜10分間展開することだ

明日に備えて色々考えないとな

アマネの父親との話し合いについて

出来れば協力関係を築きたい 力の訓練とか出来る場所を探してもらいたい まあ訓練場についてはそこまで重要な事じゃない 一番重要なのは

アマネの友人になるのを認めてもらうことだ

### 第3話

翌日 学校

今日はアマネからあいつの父親の返事を聞く日だ

「よっ！ アマネ」

「シンさん…」

「返事どうだった？」

「きてほしい と言っていました」

よし！

「ですが…」

「ん？」

「最初はあまりきてほしくなさそうでしたが、あなたの手紙を読んだら急にきてほしいと言ってきたのです」

フウ 保険をかけたいて良かった

「シンさん あの手紙は 一体…」

「秘密だ」

内容は…まあ、大体予想できる奴は多いと思うけどな

「じゃあ 今日いってもいいか」

「はい、お父様が何時でもよろしいとおっしゃっていましたので」

「じゃあ今日の放課後 帰りにアマネを誘うからな」

「はい わかりました」

「じゃあもうすぐ呼び鈴がなるから 席に戻るわ」

よし！アマネの父親… もう教祖でいいや 教祖と接触する機会が出来た 今日放課後 アマネの家に行った時が勝負だ

多分チャンスはこの1回のみ ここで失敗したら詰むって程じゃないが原作開始時かなり行動しにくくなる だけどその代わりメリットは大きい、放課後が楽しみだ。

あ、ちなみに授業は全く聞いてない 前世は高2だったらからな  
今更小学校の授業は聞かなくても大丈夫だ

放課後

「アマネーいくぞー」

「はい、今いきます」

道中

「・・・」

「・・・」

「気まずい… 話題が何もねえ…」

「まあいい 今は教祖との話し会いでやることを確認しよう」

1 翔門会ではなく教祖個人との関係

2 訓練できる場所を探してもらおう

3 アマネとの友人関係

そしてこちらの手札は

1 俺の力

2 原作知識

この2つだ

出来る限り相手に情報は渡したくはない 特に俺の力について

これは本当に最後の手段だ

この力を知った教祖が 俺を神殺しに育てるか 最悪 ベル・ベリトにバレたら俺の力を奪おうとするかもしれない(奪われるような物なのかは分からないが) 奪えなければ最悪翔門会を使って俺を消しに来る可能性がある 所詮人間ごとときと侮ってなにもしないかもしれないが 危険な橋は渡らない方がよい

「もうすぐ家に着きますよ」

おっと もうすぐか

「オーケー こっちはいつでも大丈夫だ」

「ここです」

到着か…案外普通だな 六本木ヒルズを貸切出来るからもつとでかい家にいるかと思った

「んじゃ 入るか」

「そうですね」ガチャ

「ただいま帰りました」

「おかえり」

この人が教祖か 服装以外は原作と同じだな…ってあれ？原作開始って大体後10年位先だよな？ なんでもう原作と同じ見た目なんだよ！

「お父様 シンさんを連れて来ました」

「君がシン君だね」

「はい 俺が間薙 真 です」

「まあ こんなところで立ち話もなんだし上がりなさい」

「じゃあ お邪魔します」

よしそれじゃあ

交渉の時間だ

## 第4話

俺だ 間薙 真だ、今教祖と対面している

ちなみにアマネは俺が二人きりで話がしたいといったら渋々出ていった

「では 改めて、はじめまして九頭竜さん 間薙 真です気軽にシン君とでも呼んで下さい」

「うむ ではシン君と呼ばせてもらおうよ、早速だけどこの手紙はどうゆう意味だい？」

いきなりか…

その手には昨日送った手紙があった

「そこに書いてある通りの意味ですが」

「そうじゃない、何故君がこの事を知っているのかと聞いているんだ」  
ちなみに手紙に書いた内容はシンプルだ

悪魔

神の試練

ベルの王位争い

この3つを手紙にかいた、もし悪魔だけ書いてもイタズラだと思われるかもしれないからな 原作で大事な事そして彼なら絶対にわかる事を書いておいた

さて ここからが本番だ

「実は自分ある夢を見たんです」

「夢…ですか」

「はい、夢の内容はもうあまり覚えてませんが 自分が生きている間にこれらが起こると分かったんです これは予知夢…って言うんですかね？」

「フフ、そうですね」

あ、これ信じてねえな

まあ神の試練について知ってても子供が夢の話って言ったらそれ

は信じねえか…

「話はこれだけかい？なら帰ってくれるかな？私はこう見えても忙しいんだ」

ヤバイ！ こうなったら…

「待つてください あなたに相談したいことがあるんです」

「相談かい？」

「はい…実は夢を見てからおかしな力が使えるようになったんです」

「おかしな力？」

「はい 見せた方が早いですよね」

そう言い俺は持っていたペンで手の平をさした

「君!! 一体何を!？」

「まあ 見てて下さい…ディア」

スキルを発動して自分の手の傷を直す

「これは…」

「これで信じてもらえますか？」

これ以上手札は切れない さあどうなる？

「…」

「…」

「わかりました 君の話を信じましょう」

よしー

「それで なぜ私にこの話を？」

「貴方が夢にでてきていたからです」

「なら 余計に何故私にこの話を？」

「家族を巻き込みたくないからです」

「ふむ…では君は私に何を望むのかね？」

「力の訓練ができる所を用意して頂きたい」

「残念だけど それは無理だ」

「そうですか」

「…」

「…」

「理由は聞かないのかい？」

「俺は訓練できる所が欲しいといった、あなたは無理だと言った それだけの話です」

「そ、そうか」

「あとは アマネと友人になりたいです」

「まあ、それくらいならいいでしょう」

よし！アマネと友人になれるなら十分

「それで、私からのお願いなんだが…」

…何がくる？

「…特にないよ」

「…え？」

「君の回復の力は興味はあるがそこまで必要じゃないんだよ それに君みたいな子供には任せられないからね」

え？いいの？

「アマネには私から言っておくから 今日には帰りなさい」

「は、はい お邪魔しました」

そのまま俺は帰っていった

いいのかなこれで…

翌日 学校

「よつす アマネ」

「あ、シンさん 聞いてくださいお父様がシンさんの友人になってい  
いと言ったのです」

アマネは表情はそのまま嬉しそうな声でそう言ってきた

「んじや コンゴトモヨロシク」

「はい！ これからもよろしくお願いします」

まあ、アマネが嬉しそうならいいか

## 第5話

俺だ 間糺 真だ、今は小学4年生だ。

時間が飛んだ？ 知らんな

今俺は家でパソコンをいじってる、ちなみに今やってる事はデビサバ主人公の親友 AT—LOWことアツロウを探している

アマネの事はいいのかって？

アマネだっけいつも空いてる訳じゃないからな

翔門会の巫女としての教育などがある日など俺はネットで情報収集をしている。

そして今日からはアツロウ探しに乗り出したと言う訳だ。

アツロウは子供の頃からネットで育ってきた的な台詞があり。

接触する期間を考えたら今くらいがいいと思っただからな

じゃあとりあえず AT—LOWでググって見るか…

数分後

あっさり見つかった…

掲示板サイトで普通にのってた、えっとタイトルは…

「話し相手になつてください」

なんか寂しいな…

とりあえず色々書き込んでみるか

数十分後

仲良くなった

あるえ？ あっさりし過ぎじゃね？

まあ流石にオフ会まで話は持つていけなかったが、一緒にいろんなネトゲを使用と約束してメールアドレスを渡した

俺も俺で無用心すぎな気はするけどまあいいか アツロウの方も渡してくれたし。

さてと、これからはアツロウの好感度UPをメインに活動するか。

もちろんアマネもだよ。

ちなみにアマネとの関係は良好だ、ただアマネは俺以外の友人を作らない：いや作れないと言った方が良いな。

俺以外と友達作るな、と言われたら嬉しいだから話相手も俺しかいないしグループやペアを作る時も俺が色々頑張っている。

まあアマネとの関係は今別がいい

それより特訓の成果だ

この3年間ただダラダラと過ごしていた訳ではない

なんとあのエネルギーの剣を約十分間展開出来るようになったのだ！

しかもこの剣スキルに分類されるらしく長時間展開しても疲れない、ただかなり神経を使う、どれくらいかと言うと、糸を針に10本連続で通す位神経を使う

あとなんと！あの人修羅の刺青が出たのだ！（うなじにもちゃんと角はあった）

これには俺も興奮したそれでこの刺青なんだが自分で好きに出したり消したりできる、あとこの刺青が出ている間は

マサカドウスと同じ効果がある

マサカドウスと同じ効果がある

大事な事なので2回言いました

そう貫通物理と万能以外を無効にするマサカドウスである

これも俺に勝てる奴いないんじゃないのと思ったその貴方、甘い甘すぎる、こんなもん閣下のメギドラダイソン5発で吹き飛ばしたとえ耐えられてももし閣下がデビサバ使用ではなく真3使用だった場合、デコピンには耐えられん

だから俺は過信しない、この程度閣下ならあっさりぶつとばすからだ。

でもこれで俺も本格的に人間をやめたな…

俺は人間をやめるぞ！アマネエエエー！！

…一度言ってみたかった

さてとアツロウにオススメのゲームがあるか聞いて見るか

## 第6話

よう、俺だ 間雑 真

…なんかほかに挨拶の文考えようかな、今俺は中1だ。

また時間がとんだって？ 延々と瞑想したり アマネやネットで  
AT—LOW（本名を本人から聞くまでは本名は使わない）と普通に  
遊んだり雑談したりと普通の生活を送っているだけだからな つま  
らんだろ。

あ、ちなみにアマネとは同じ学校だ

そして今日前世を含めて初めてのオフ会だ（本当は何度か誘われた  
が都合が合わずいけなかった）

参加するのは 俺 AT—LOW そして10bitさんだ。

AT—LOWと10bitはすでに面識があるらしい他の人は都  
合が悪く不参加だ 待ち合わせ場所は〇〇の駅前だ集合時間は朝の  
10時、ちなみに俺はもうついている時間は9時半 時間より先に行く  
のがいいと思い早めに家から出た。

今の格好は真3の東京受胎が起きる前の格好を想像してくれ

一応今回オフ会に参加する人たちの服装はみんなが把握している

AT—LOWは原作と同じ10bitさんも原作と同じらしい

それでいいのか10bitさん…まあ、わかりやすくもいいけど  
さ。

まだ少し時間があるし少し自動販売機で飲み物でも買うか

ピガシャン

「ん？なんだこれ？」

謎の飲み物を手に入れた

「こんなの 自動販売機にあったか？」

何時探しても同じものが見つからない

「この展開どっかで見たような…」

…

「もしかしてこれ…」

○（・ω・、≡・ω・）○ ダレモミテナイヨネ？

(´・ω・｀) ボソツ アナライズ

(´\*ω\*｀) キラッ

(´・ω・｀) …

:(;´。´ω´;) :

ソーマだこれ

あ、俺のアナライズはなぜか物にも使える（俺の知識以上の事はでないが）

さすがにこれを飲むのはもったいない

もう一度周りを確認してつてここ駅だから人多い

トイレに行くか

移動中

「ここなら誰もいないな」

目の前で何も無い空間を思いつき切り裂く、すると目の前に大きな爪跡が残った。そこにソーマを投げ込む

そして跡が消えろと念じると爪跡は消えてなくなった

これはアイアンクロウの練習中に出来るようになった原作人修羅はここに大量のアイテムを入れていたのだろう

「そろそろ時間か…」

俺はこの場を去った

駅前

そして待つこと数分

ある男が話しかけてきた

「貴方がノクターンさんですか?」

「そうだよ、そうゆう君はA T — L O W だろ?」

「え、ええ そうですよ」

ノクターンは俺のハンドルネームだ

「A T — L O W が話しやすいように喋ればいい 俺はそうする」

「お、おう わかった」

「で10bitさんは?」

周りを見渡す限りそれらしい人はいない

「ああ 10bitさんならトイレにいつてるぜ」

「そっか」

「先にいつててくれってさ」

「そうか、じゃああそこにある喫茶店にするか」

「わかった、10bitさんには俺から連絡しておく」

そう言いながら電話にメールしていた

喫茶店内

「じゃあ 改めて、俺がノクターンこと 間薙 真 中1だ。気軽にシンと呼んでくれ」

「俺はAT-Lowこと 木原 篤郎(きはら あつろう) 中2だ  
よろしくな」

「じゃあアツロウって呼ばせて貰う」

「おう いいぜ」

「しかしアツロウが年上とはな(本当は知っていたが)」

「俺もビックリしたよ シンが年下なんててつきり年上だとばかり  
…」

まあ精神年齢はこっちが上だからなあ

チリーン

イラッサイマセ

「あ、10bitさん こっちこっち」ノシ

この後10bitさんも入れて雑談した

## 第7話

俺だ 間薙 真だ（結局思いつかなかった）  
今俺は中2だ。

今は学校にいる：少し学校ついて話そうか、俺やアマネが通う学校は普通の私立中学校だ。

普通に制服もある：つまりアマネの制服姿が見れるのである。

あつ、ちなみにアマネはあのカチューシャはつけてない：そういえばアマネの頭にある花（？）あれってカチューシャだったんだなずっと髪だと思ってた。ここでもアマネはやっぱり変わらなかつた。ずっと無表情のままだ：ただ俺の前だとちよつとだけ変わるようになったけどかなりわかりにくいが。

でこの学校にはある物がある：それは

アマネのファンクラブである。

もちろんアマネは知らない、アマネの事を無表情で気味が悪いと思う奴らが多いが

その無表情な目で見てください！

我々の業界ではご褒美です！

あ…あの女の日……………

養豚場のブタでもみるかのように冷たい目だ：残酷な目だ：

「かわいいそうだけど、あしたの朝にはお肉屋さんの店先にならぶ運命なのね」

ってかんじの！

と言う奴らも多数いるわけでそいつらが集まってできたのがアマネファンクラブである。

何故そんなに詳しいのかって？

それは…

「…情報をくれ」

「…合言葉は？」

「九つの頭を持つ龍を見守る者」

「あつてるな、でなにが聞きたいんだ？」

俺は今情報屋まがいの事をやっている、原作である東京封鎖が始まった時情報収集能力が高い方が良いと思ったからその練習をしているのだ。でその情報の中にアマネファンクラブの情報があつたそれだけの話だ。

合言葉について？ 思いついたのがこれだった。

ちなみに今は昼だ

あ、いい忘れてたが俺はアマネと同じクラスだ…ってか小学校の頃からずっと同じクラスだ。

そういえばアマネとケータイ番号まだ交換してなかったな今日やつとくか。

放課後

「おーい、アマネ帰ろうぜ」

「わかりました、少し待ってて下さい」

ヒソヒソ

ん？

誰かがひそひそ話してんな…ちよつと聞いて見るか

「マナギのやつよくクズリユウと一緒にいるよな」

「もしかしてあいつら付き合ってるのか？」

「リア充死すべし慈悲は無い」

「リア充爆発しろ」

・・・

「そつとしておこう」

「シンさんどうしたんですか？」

「いや、なんでもない」

「そうですか」

「じゃあいくか」

俺達は教室から立ち去った

帰り道

「そういえば、俺たちってケータイ番号交換してなかったよな」

「はい、そうですね」

「今しとくか」

「なぜ今なんですか？」

「いや、来年俺は高校受験で忙しいしアマネは高校にはいかず翔門会の巫女としても活動するからあまりあえなくなるかもしれないからな今の内にやっところうってわけだ」

「…そうですね」

「じゃあ交換すつか」

「はい、では…」

俺とアマネはケータイを取り出し番号を交換した

「よし、完了つと じゃあ俺こっちだから」

「はい、ではまた明日」

アマネの番号ゲットだぜ！

さてやる事やったし家に着いたら訓練して遊ぶか

訓練についてだがそろそろ頭打ちしてきたさすがにバフや回復

エネルギーの剣 これだけしか訓練できず強くなった気がしない、一応ある方法を考えてはいるが安全が保証されてないからやっていないが…今度やるか

別の時空での訓練を

## 第8話

俺だ 間糺 真だ。

今俺はあることをしようと思っている。

それは…別世界での訓練だ。

どうやってやるのかって？それは俺が普段道具入れに使っているあれ…今は王の財宝（仮）とでも言うか（あとでちゃんと名前考えるか…）あの中に俺が入る。

危なくないのかって？だから今までは考えるだけにして実行はしてなかった。

だが今までの訓練方法じゃ頭打ちしてきたから今実行しようと思つたわけだ。と言うわけで行くか

思いつきり目の前の空間を切り裂く、いつものサイズじゃ俺は入れないからな。

「フウ…ジャッ」

勿論掛け声も忘れない。

目の前にできた爪跡その中に迷いもなく突撃していく。

物おっ…王の財宝（仮）内

…ここって

「魔人戦の時のステージじゃあねえか」

そうここは魔人戦のステージとそっくりなのだ。

ただ俺が普段入れている物が見つからないが…ってあれ？

この荒野の中にぽつんと何かが置いてある

「アレって…」

近づいて拾って見る

（— — — — —）

（— — — — —）

Σ (・□・;) 「COMPじゃあねえか!？」

コミュニケーションシヨンプレイヤー通称COMP この世界ではケータイゲーム機であり アツロウはケータイに近いと言っていた奴だ。

「何でこんなもんがここに…」

その時COMPからメールの着信音が響いた

…見てみるか

返信者「神様」

(・ω・)

— (。D) ……

ツカレテンノカナ (つD) ゴシゴシ

(; D) ……

(つD) ゴシゴシ | , . |

(; D) …!？」

神様から!？」読むか

From: 神様

Subject: 元気かの？

フム、久しぶりじやの。元気じゃったか？わしは元気じやよ。おぬしがこれ読んでいるということはこのわしが用意した訓練場にいるわけじやな。

おぬしが転生して少したった頃に現代社会では訓練できないのでは？と思ひその訓練場を渡した訳じや。ちなみにこの場所はおぬしが物を入れているのとは別の場所じやよ

まあおぬしが入り方に気がつかなければ知らぬまま一生を過ごしたじやろうがな。

それとこのCOMPじゃが原作に会った改造COMPと少し違うがまあ違いについてはもう一つのメールに書いてあるじやろう。でその訓練場には特殊な効果があつてなここに居る間は外つまり現実世界の時間は止まっておる、そしておぬしの成長も止まっておる。

ゲームで言うレベルアップは可能じゃが年を取らないのじゃ。

後もう一つおぬしが望めば魔人と戦うこともできるぞ、全ての魔人を倒したらご褒美をやろう。

まあ他にも色々伝えたいのじゃがもうすぐ試合での、では次会うのはおぬしが死んだ時じゃの。じゃあの

追伸：そちらからわしにメールはできないからの

このメールを読み終わったらもう一通メールがきた

まあ読む前に

「試合前に書いてんじゃねえよ！試合が終わった後か空いてる時間にしろよ！」

ハア：まあいいこの場所についてはお礼を言つとくよ

ただ一つ気になる事が書いてあったな…そう

魔人

これは真女神転生3で出てくる人修羅の敵だ

そいつらと戦える？ しかもご褒美があるだつて？やるしかないじゃないか！訓練した後に。

さすがに今すぐやる程無謀ではない。まあもう一通のメールを読むか

From：神の部下

Subject：COMPについて

このCOMPの説明をさせていただきます。

1このCOMPは 邪教の館 デビルオークション 悪魔全書はありません 仲魔は東京封鎖の前日に指定されたものが召喚可能となります。

2仲魔は戦闘不能になっても1時間後には復活します。

3 スキルクラックは3つだけ可能です。のようなスキルでもクラック可能です

4 このCOMPにはAIがありこのメールを読み終わった後に出現します

5 このCOMPは通常のCOMPでもメールを受信可能です  
以上を持ってCOMPの説明を終了します

色々言いたいがまずは…AI？

「やつほくみんな大好きティコりんだよ☆」

「ティ、ティコ!？」

画面に紫色の髪を持つバニーガールが出てきた

ティコつてもしかしてデビサバ2のアイツか？

「ねえねえ あなたの名前を教えてください☆」

「あ、ああ俺の名前は 間雑 真だ」

「間雑 真ね、登録完了つと☆」

何か聞きたいことがあつたら言つてね☆それでは！ハブ・ア・ナイ  
スたく☆」

そう言いながらティコは画面からいなくなつてた

ハア：なんか色々疲れた 訓練しないでもう帰ろう

あ、ちなみにCOMPの見た目は3dsだったつまりデビサバでも  
オーバークロックつてことか

## 第9話

俺だ 間薙 真だ。

今俺の部屋のベットのの上にいる。

訓練しに行ったのに何もせずに帰ってきたんだ、COMPの電源は切つてあるさもないとテイコが話しかけてきそうであ。

とりあえず前回読んだメールの事をまとめよう。

訓練場について

- 1 訓練場内に居る間は外の時間は進まない
- 2 訓練場内でのレベルアップは可能
- 3 訓練場内では俺は年を取らない
- 4 訓練場では魔神と戦える

訓練場についてはこれくらいか？

1 についてはさつき時計を確認したから間違つてはいないと思う、  
2 3 4 については確かめてはいない為わからない、だが魔人を全て倒せばご褒美：つまり特典があると神は言っていた、当面の目標ができたな。それは

原作前に魔人を全て倒す

まあ、技の訓練をした後でだけどな。

マタドール相手なら魔人化（人修羅の刺青がある時をこう呼ぶことにした）中なら攻撃は効かないだろうし、明日学校は学校は休みだし、明日技の訓練をしたら殺るか。

後もう一つのメールについてもまとめるか。

1 このCOMPには 邪教の館 デビルオークション 悪魔全書がない

2 仲魔は東京封鎖の前日に指定されたものが召喚可能となる

3 仲魔は戦闘不能になつても1時間後には復活する

4 スキルクラックは3つまで可能、どのようなスキルでもクラック

可

5 このCOMPにはティコがいる

6 通常のCOMPからメールが来てもコレなら受け取れるし送ることができる

1と2は正直つらいぞ、使える仲魔は増えないし、指定された仲魔もわからない。

使えるようになるのは東京封鎖の前日つまり原作のプロローグの時だ、そして強いのか弱いのかもわからない。

3 については特に気にならない7日目でも無い限り連続戦闘はあまりないからな。

4 これが一番気になる、このどのようなはどこまでOKなのかメギドラダイーンや神の風にも使えるのか。まあいいその時まで待てばいいか、最悪使わなくてもいいいな。

6 もまあどうでもいい

5 これは問題だ日常生活で話しかけられたらかなり困る、他人から見たら女の声がゲーム機から俺に話しかけてくる。

他の人がいる前でラブ〇ラスをやってるようなもんだ。

…音量下げたら聞こえなくなるかな、やって見るか。

COMPの電源を入れる

少し音がなって電源がつく

「やつほー☆おはっ…」

音量を下げたら聞こえなくなった。

「………」

何か画面叩いてる…可哀想だし音量上げるか。

「もう！なんで音消しちゃうの！」

「すまん、ちよつとした実験だ」

「先に言っつてよね！ もう！」

「で、COMP使いたいだけどいいか？」

「しようがないなあー、許してあげる☆でも今回だけだよ☆」

「おう、わかった」

COMPの仲魔編成の所で俺のステータスを見てみる

人修羅 間薙 真

Lv 1

力 20

魔 21

体 20

速 15

物 1

火 1

氷 1

風 1

雷 1

魔 1

スキル

魔人化

混沌王

人修羅

ノーコスト

1

1

1

(. . .)

既にステータスがおかしい、スキルの覧で三つ空いてるのはクラック用か？じゃあもう一つのやつは？

とりあえずスキル説明を見るか

人修羅

混沌王 人修羅が使用可能なスキル全てがこのスキルに収まっている (クラック不可)

魔人化

魔人化中万能属性以外の全ての攻撃を無効にする (銃属性も可)

ノーコスト

全てのスキルの使用コストをゼロにする (クラック不可)

混沌王

かつて全てのコトワリを退け YHVHを打ち破った者  
真に力を求める時 その力を使えるだろう

∴(・・ω・・)

皆はなにも見なかった、いいね？

ステータスも何も見なかった、いいね？

「なあ、ティコ」

「なーに？☆」

「出来れば俺が話しかけない限り絶対に話しかけないでくれ」

「わかったよ☆マスター」

∴もうツツコマないぞ。

もう疲れた、寝る

## 第10話

俺だ 間糺 真だ

訓練場を見つけてから1日たった、今日訓練をした後に

魔人 マタドール と戦う、まあ今色々言っても仕方ないからな行くか。

俺は自分の部屋から訓練場の入り口を作ってその中に入って行く

訓練場内

ついに、ついにこの日がきた。

転生してからはや15年（実際は記憶が蘇ってからだと9年）

現代社会では絶対に使えない人修羅の技の数々、それが今日初めて使える。

「何か的になるようなのないかな？」

そう呟いた瞬間

PON

という音と共にカカシが出てきた

…これが的か？

じゃあやらせてもらうか。

右手を的に向けてまっすぐ伸ばす、そして左手で右手首を抑えて右手に力を込める、右腕が光出した 右手の照準がブレる左手で無理矢理照準を合わせる。

「これ、キッツ…」

右手のエネルギーが最大まで溜まった

「ハァッで……！」

右手に溜まっていた手から飛び出る

「破邪の光弾！」

光弾は的にかすってそのまま明後日の方向に飛んでいった

「…」（ω・ω・、）

ムズッ

人修羅ようこんな当てられたな…

ほ、他の技だ！

自分を抱きしめるように、何かを持っているように、姿勢を低くして上半身にエネルギーを送る、そしてエネルギーが溜まったら、それを解き放つ！

「ゼロス・ビート！」

カカシにエネルギーの：槍？雨？この場合どっちだ？

(まあいい) が降り注ぐ！

さすがにこれは外さないか

次hへカット

(一通り技を試した後)

難しい…こうなりやあ特訓あるのみだ！

訓練の様子をダイジェストでお送りします

「ウオオオオ」

気合い＋破邪の光弾を撃つたり

「ガアアアア！」

雄叫びをあげたり

「ウリヤアアア！」

マグマアクシス撃つたり

まあ色々やったり

訓練場内時間6ヶ月を過ぎた頃

「やったぞ…ついに全ての技を完璧に使えるようになったぞ!!」

まだ技名を言う必要があるけどな

もう疲れた魔人は後だ

部屋に戻ってベットに身を投げだし泥のように眠った

翌日 訓練場内

今日は訓練せずに魔人と戦う、相手はマタドール、大丈夫だ今ま  
でずっと訓練してきたんだ、魔人にも通用するはずだ。

「魔人 マタドールと戦いたい」

俺がそう言った瞬間

ドクン

周りの空気が変わった、そして目の前には骸骨の闘牛士が現れた。

「…」

骸骨の闘牛士：マタドールは静かにその場で佇んでいる、

ただわかる、自分の方が強いと雰囲気で分かった、だけど何故か身  
体が震える武者震い？いや違うこれは

恐怖

魔人とは「万人に等しく凶事と死を撒き散らすもの」である  
それに人間の部分が恐怖しているんだ 力ではなく存在に。

人間が相手にはいけないと本能で分かってしまった。

だけど、だけど俺はあいつに勝つ！

人間が相手にはいけない？

「ハッ 笑わせる」

俺の種族は人修羅だ、勝てねえどうりはねえ！

動けよ！俺の体！今アイツをぶっ飛ばしてこの世界で生きていく  
覚悟見せてやる！

ゲームの世界とか関係なく一人の人間…いや

人修羅として！

「スウ 人間賛歌は「勇気」の賛歌ツ!!

人間のすばらしさは勇気のすばらしさ!!

今俺は人に非ず 悪魔に非ず だが元は人間！

俺の勇気を今！テメエに見せてやる！」

「魔人化アア！」

俺が魔人化した瞬間マタドールが動き出した

「気合い！」

マタドールは俺に突撃してきた

赤のカポータは使わないのか？ なら

マタドールの攻撃を受ける…が

ギリギリの所でマタドールの攻撃は俺に届かない

「マサカドウス舐めんな！」

そのまま俺はマタドールの骨の顔面を思いつきり殴った。

「オラア!!」

マタドールはそのまま吹っ飛んで途中で体勢を立て直した

「どうした！その程度か？」

マタドール骸骨の歯を鳴らし俺を挑発してきた

イラッ

落ちつけマタドールの挑発つまり相手の体力は半分以下だ

ならここは

「気合い」

これで…

「…」ブウン

マタドールの空気が変わった相手も気合いを使ったか

上等だ

血のアンダルシアを使つて来いよ

「返り討ちにしてやる」

俺は居合の構えをとったそしてそこからエネルギーの剣が出てくる

「…」ダッ

「…」ダッ

俺とマタドールは同時に動いた

「死亡…遊戯！」

「…！」

血のアンダルシアと死亡遊戯がぶつかり合う

ガン

ドサツ

マタドールが倒れた

「マタドール、俺の勝ちだ。」

そして俺もその場に倒れた

気絶はしてないが

「っ、疲れたアアアアアアアア」

体力は減らなかつたが、精神力と集中力を思いつきり使った。

「もうこのまま寝たい」

いや、流石にそれはダメだ

俺は自分の体を引きずりながら部屋に戻って

シャワーを浴びて

グツスリ眠った

「頑張ったね☆マスター☆」

そんな声が聞こえた気がした

## 第1話

「地母の晩餐!!」

俺だ、間雑 真だ。

今最後の魔 トランベッター 人を倒した所だ。

つまり、特典が貰えると言う事だ。

あ、ちなみに今は中3の夏休み中だ。

「メールが届いたよ☆」

COMPからティコの声が聞こえてくる。

このタイミングでメールか…

「ああ、今から見る」

From:

Subject:力の解放

全魔人の討伐を確認しました

貴方の力を解放します

…これだけか? 返信者に名前もかk

「ガアッ!?!」

身体が焼けるように熱い!?

そのまま俺は倒れ込み獣のような叫びを上げて気絶した。

目が覚めたのはそれから約十分たってからだった

「ハハハ…」

「マスター☆起きたの? ☆」

COMPからいつもの調子のティコが話しかけてくる。

「ああ、起きたよ。」

「ねえねえマスター☆みてみて！ マスターのステータスが凄いことになってるよ☆」

寝起きにテイコの声は頭に響くなチクシヨウ、でステータスだっけ？ 頑張つて魔人倒したんだ、いいもんじやあねえと神様に顔面一発御見舞いしてやる。

人修羅 間薙 真 L v . 255

力 40

魔 40

体 40

速 40

物 |

火 |

氷 |

風 |

雷 |

魔 |

スキル 人修羅 | |

魔人化 ノーコスト 死兆石

混沌王

…これも俺だけでいいんじゃないかな？

スキルが一つ増えてるし。

…見てみるか

死兆石

いくつかのスキルが変化する (MUGEN使用)

うん、どうしよう。

確かにMUGENとはいえ人修羅は人修羅だ、人修羅の使用可能スキルの範囲内だろうけど…

原作前に強くなりすぎだよ俺!!

このステータス誰かに見られたら…。

もうどうにでもなれ。

あれ？ 混沌王のテキストが少し変わってる？

混沌王

かつて全てのコトワリを退け YHVHを打ち破った者

既にその力の一端を使用している その真の力を使うには…

テキストはここで途切れている

てかこれで一端なの？ 真の力なんて手に入れた日にはどうなるの

？

もういいや、寝よう明日も明日でやることがあるからな。

翌日

今年が多分学生として過ごすことができる最後の夏だ、来年の夏には原作が始まる。

その時俺の立場はどうなっているのかはわからない、この世界がどうなるかも主人公次第だ。

俺がやる事は特にない原作に入ったらいきあたりばったりで楽しくやるさ。

来年高校入ったら俺は山手線内のアパートで一人暮らしを始める、親に無理言っただけなんとか許可をもらった。

で今日やる事は…

夏休みの宿題だ

そう、たとえなんど経験しても悪夢にしか見えない奴と戦っているのだ。

俺はコイツを倒して見せる！

そして俺は最高の夏休みを満喫するんだ！

## 第12話

俺だ、間糺 真だ。

俺は、ある物を買いきている。

それは…

「お、あつたあつた」

手動式のcompの充電器だ。俺のcompは神様のおかげなのか電池の減りがかなり遅い。

どれくらいかと言うと、3日間フルで使っても50%しか減らない。

だけど、どれだけ減るのが遅くても、減るものは減る、それに、封鎖中に行き行って売り切れとかになっていたらシャレにならない。

あとは、カモフラージュの為にも必要だ。

「さて、目的の物も手に入ったし、帰るか。…ん？あれって…」

俺が見た先にあつた物は…

「主人公がつけてたネコミミヘッドホン？」

そう、主人公がつけていたネコミミヘッドホンが売っていたのだ。

「…ついでに買ってくか」

7日間の封鎖の間、全く壊れなかった奴だ多分何かの役に立つだろう。

アリガトウゴザイマシター

もうすぐ夏休みも終わる。

来年の今頃、世界はどうなっているのか。

せつかくデビサバの世界に転生したんだ。

原作を全力で楽しんでやるか。そのための力もある。

その前に受験勉強しなきゃ、アツロウに教えてもらおう。

あ、ちなみにアツロウが通っている高校に行くつもりだ。

アツロウ「ナオヤの弟子になった」って自慢してたからなあ。

つまり、原作主人公との顔合わせもすんでるってことだ。

アツロウと同じ高校いけば会えるだろ。

アマネとは最近全く会えてない。学校でなら会えるんだが。

翔門会の巫女としての訓練が忙しいらしい。確か幼い頃から神魔の声を聞く力があり、そのために幼少時にその身にイザ・ベルを憑依させられ、父親の野望成就のために利用された、って言われてるけど初めてあってから夏休みが始まる前までには悪魔の気配はしなかった、だけど吸血事件が起きるのは原作の半年前で、悪魔がこつちに来るようになったのは、ジコクテンを倒したから（悪魔召喚プログラムを使わない悪魔召喚は除く）。

つまり、今頃アマネはイザ・ベルをその身に宿らせているんだろ  
う。

来年の春にジコクテンを倒すために。

アマネには悪いけど、イザ・ベルについてはノータッチだ。

吸血事件も俺は関わらない。

そもそも吸血鬼<sup>クドラク</sup>倒せるのはクルースニクだけだ。クルースニク以外の奴が、クドラクを倒すと、翌日には強くなって復活する。

だが、悪<sup>クルースニク</sup>魔を呼ぶには強い感情が必要だ。

マりにクルースニクを呼んでもらった方が色々楽だしな。

（出来ればカイドーの恋は実って欲しいし）

イザ・ベルについても似たような感じだ。主人公がベルの魔王になるにはベル名を持つ悪魔倒さなければならぬ。（ルートによっては倒さなくてもいい）

あとジコクテンを倒してもらわないと原作が始まらない可能性がある。  
ある。

だから俺は原作が始まったら好きにやるが原作前は下準備だけをする。

まあ、来年の春から世の中物騒になるだろうって話だ。

## 第13話

俺だ、間糺 真だ。

今日は中学校の卒業式だ。

え？時間が飛びすぎだって？仕方ないじゃないか、特になにもなかったんだから。

で、今何してるのかと言うと

桜の木の下でアマネを待ってる

これだけだと、告白されるのを待っているように見えるだろうけど、違う。

アマネがこれから会えなくなるから出来れば会っておきたいって言うてきたんだ。

まあ、悪魔イザベの気配が夏休みが終わった後、アマネから感じられるようになったからなあ。

それから俺を遠ざけるようになったし。俺を巻き込ませたくないのかなあ。

つとそんな事を考えていたらアマネがきた。

「お待たせしました、真さん」

「いや、待ってないよ」

とりあえずお決まりのセリフを言ってみる。

「で、話しててなんだ？」

「明日から、私は翔門会の巫女として活動しなければなりませんので、これからはあえなくなるかもしれない、ですから会って話しがしたかったのです」

まあアマネは俺以外に友達いないもんなあ…。

それから俺とアマネは普通の話しをした。

友達と話すような普通の話し、悪魔も天使も翔門会も関係ない、日常生活で普通にあるような話しを空が暗くなるまで時間を忘れて話

していた。

アマネは終始、楽しそうだった。

「もう、こんな時間か…」

「私は、もう行かないといけませんね」

「おう、電話番号はもう交換したし、いつでも気軽に電話やメールしろよ」

「はい、ではさようなら」

そう言いながらアマネは歩いて行く。

さようなら…か…

「アマネ！」

アマネが振り返る

「またな！」

アマネは少し目を見開いて、少しだけ笑顔になって歩いていった。

アマネ…笑えたんだな…

それから数ヶ月後

「おーい、アツロウ先輩」

「ん？ おお、シンじやあないか！ここ入ったのか！」

「ああ、アツロウ先輩のおかげでな」

俺は無事に高校に入学した。

「その先輩ってなんなんだ？」

「一応、後輩だからな俺」

「ねえ、アツロウこの人誰？」

「ああ、紹介するよ、こいつは間雑 真。ネットで知り合った俺の友達だ。」

「どうも、間雑 真です。シンとでも呼んでください」

「あ、私は谷川 柚子（タニカワ ユズ）。で彼が…」

「峯岸 一哉（ミネギシ カズヤ）だ」

「ユズ先輩にカズヤ先輩ですね、コンゴトモヨロシク」

原作の主人公三人組に会えたぜ。

キーンコーンカーンコーン

「あ、もうクラスに戻らないと、ではまた」

放課後

俺の帰り道はぼっちだ。

相変わらず俺の友達は少ない。

俺の電話に入ってる番号は 両親 アマネ アツロウ

1

Obitだけだぜ。：（・ω・）

今俺は山手線内にあるアパートで一人暮らし中だ。

「今年の夏…かあ…」

今までの準備は今年の夏のためにやってきた事だ。

その成果をやつと使える。

ネットでスレをあさつてると、あるスレを見つけた

「マジものの」全身から血を抜かれた死体「吸血鬼!？」

きたか…まあ俺には関係ないけど。

## 第14話

俺だ、間糺 真だ。

今、終業式が終わって帰り支度をしている所だ。

「おーい！シン、カラオケ行かないか？」

クラスメイトの田中がそう言ってきた

「おうー！いくいくー！」

ちなみに高校入ってから友人が出来たしクラスメイト同士の付き合いもできた。

「よし、じゃあシンも参加か」

「何人来るんだ？」

「俺とシンを含めて5人だ」

「じゃあ、行こうか」

原作が終わったら、俺はコイツらと一緒に遊びに行けるのかな…

帰り道

「じゃあ、俺はこっちだから」

「おう、またな」

こうして俺は田中たちと別れた

「ん？メールか？」

アパートについて少したった頃携帯にメールが届いた

「アマネから？内容は…っと、なにに？8月7日は山手線外に出てください？」

原作が始まる日を把握できたのはいいぞ。

これで準備が出来る。

まず話をしよう、あの物置（もうこう呼ぶ事にした）についてだが、あの中に時計と氷を入れて3時間程放置したんだ。

そして時計と氷を取り出してみたら時計は入れた時の時間のまま止まっていた（取り出したら動き出した）氷の方は溶けずにいた。

つまりあの中の時間は止まっている、まあ最初はそこまで重要視しなかったんだが、よく考えたらな封鎖内でうまい飯が食えるのでは？  
と思いたったわけだ。

(その日から料理を自分で作るようになった)

で、何が言いたいのかと言うと…

食糧を買い込まなきゃ

と言うわけで今はいろんなデパートやコンビニで買い物している。  
一つの所で買いきると不信に思う人が出るかも知れないからな。

あ、あと金については問題ない。

情報屋としての仕事してみたら裏に片足突っ込んだがそこそこ  
…ってか、かなりの額を貰っている。

常連もできたし、渋谷ダイモنزの人たちとの交流も出来た。

まあ、それについてはいいか。

で買った物を軽く書いておく。

ガスコンロ、ガスコンロの燃料、食糧(肉や野菜など)、水(ジュースも)、菓子など

他にも色々あるが、まあ大体こんな感じだ。

で、今帰宅しているんだが…

「…」

「…」

目の前にナオヤさんがいる

ナオヤさんがいる

大事な事なので2回言いました。

一応ナオヤさんとは面識がある、以前アツロウが紹介してくれたその時は大体アツロウが話して自分は相槌を打っていただけだが。

「…これをやる」

「え？」

「いずれ必要になる」

そう言つてCOMPを渡して去つていった。

あの、ナオヤさん：自分もう持ってます。

アパートに帰つてきた。

とりあえず荷物を全部物置に入れとくか。

そういえば、以前原作に加入すると言つたが主人公と共に行動するのは出来る限りあとの方が良い。

確かに共に行動して俺tueeeeはしたいが、

所謂経値ドロボーになつて主人公たちの成長の阻害になつたらいけないからな。

そうだな、立ち位置的にはチャラ男ロキと同じ感じにしよう。

ただし情報が欲しければマツカを貰う情報屋として活動するか。

で、7日目のルートによつて仲間にも敵にもなるキャラ

そういう風にするか。

原作開始

DAY BEFARE 日常の終焉（非日常の始まり） 1

8月7日

AM・8:00

「マスター！マスター！」

ティコの五月蠅い声で目が覚める。

「どうしたんだ、ティコ。そんなに騒いで」

俺は 欠伸をしながらティコに話しかける。

「マスター！やっと起きた！」

「おう、ちよいと顔洗って来る」

「待って、マスター！それどころじゃないよ！」

「そんなに焦ってどうした？」

いつものおちやらけた雰囲気ではないティコに俺は真面目に話を聞く。

「今にも悪魔召喚プログラムが起動しそうなんだよ！」

……え？

「確かに、今日は東京封鎖の前日だけど、なんで悪魔召喚プログラムを抑える必要があるんだ？」

「悪魔たちは、まだマスターと契約してないから、普通にマスターを襲うのー！」

∴

← 今日から召喚可能

← つまり夜中の12時から召喚出来る

← 俺はグツスリ眠っていた

← （原作開始前に疲れを残さないため）

悪魔はCOMPの持ち主が死ねば自由

← 魔人化してないため無効無し

← (´O´)／

俺は、すぐに時空の裂け目を作りCOMPを手を持った。

「ティコ、もう少し頑張ってくれ！」

「マスター、早く〜！」

そのまま訓練場に飛び込んだ

## 訓練場

「ティコ、もういいぞ」

「ふい〜…疲れたよ〜…」

ティコの返事を聞いた瞬間、魔人化するが、悪魔は出てこない

「いい忘れてたけど、ここにはマスターが許可しない限り、なにも入ってこれないよ☆」

「そうか」

そう答えるが、警戒はとかない

「で、悪魔と契約するにはどうしたらいい、原作みたいになぶつとばせばいいの？」

「うん、それであってるけど…」

「けど？」

「今のマスターなら、相手が命乞いをするとと思うよ☆」

「じゃあ、何で悪魔召喚プログラムを抑えてたんだ？」

「どんな強者でも、寝てる時は無防備なんだよ☆ あと、マスターは魔人化しないと普通の人間と同じに見えるんだよ☆」

「そういうことか…、ありがとう。ティコ、お前がいなかったら俺は死んでたよ」

「もちろん！私は、マスターのパートナーだからね☆」

「えへへ☆マスターに褒められた☆」そんな声が聞こえてきたが、まあ

いい

「じゃあ、呼ぶぞ」

「うん☆頑張つてね、マスター☆」

「悪魔召喚プログラム起動!」

そう俺が言うと、COMPの画面に文字が流れていく

悪魔召喚プログラム起動OK

起動　　します

Peaceful days died.  
Let's Survive.

その文字が現れると共に、3体の悪魔がでてきた。

1体じゃねえのかよ。

「アハハ、あなたが私を呼んだの?じゃあ、あなたを殺せば私は自由に…ッ!?!」

「我を呼んだのは汝か?ならば我の自由のために…ッ!?!」

「ウフフ、ねえ、あなた死んで…「てい」あう」

出てきた悪魔はピクシー、ヨシツネ、アリスの順だ。

デビサバに出てくんの1体しか　いねえじゃねえか。

ちなみに、物騒な事を言うアリスにはチョップをかましてやった。

「ヒツ…なに、こいつ。こんなの勝てるわけがない…」

「…」

「むうー」

ピクシーは俺を見ながらプルプル震え、ヨシツネは蛇に睨まれたカエルのように動かず、アリスは頬を膨らませていた。

「さて…お前ら」

ピクッ

アリス以外が反応する。

「俺の仲魔になってくれるか?」

「わ、わかった。仲魔になるから殺さないで…」

「うむ、強き者について行くのが悪魔の掟、仲魔になろう」  
「フンッ」

アリス以外が了承する

「ハア…さっきの事は謝るから、俺の仲魔…いや、友達になってくれな  
いか?」

「えっ!」

アリスが目をキラキラさせながら俺を見て来る

「じゃあ、死んでく「よつと」んっ」

俺は人差し指をアリスの唇に当てた

「俺は、死にたくない」

「でも、友達になってくれるって…」

「ああ、生きたまま君の友達になるんだ」

「生きたまま?」

「そうだ」

「ん…わかった!私と友達になってお兄ちゃん!」

「ツ!? ああ、わかった」

今、一瞬 妹がかぶって見えたな…

いや、あいつはこの世界には居ないんだ。忘れよう。

「えつと…、私は妖精 ピクシー。コンゴトモヨロシク」

「我は幻魔 ヨシツネ。コンゴトモヨロシク」

「私は魔人 アリス。よろしくね、お兄ちゃん」

「俺は間雑 真だ」

三体の悪魔はそう言うときCOMPに入って…

「なにこれ!急に力が湧いてきた!」

いかなかった

アリス以外の仲魔の雰囲気が変わった

「まあいいや。じゃあ、必要になったら呼んでね、シン」

「では、我も行かせて貰うぞ、主殿」

「お兄ちゃん、すぐに呼んでね!」

そう言っって仲魔たちは、COMPの中に入っていった

「…あつさりしてんなあ」

「しようがないよ。マスターはそれだけ強いんだから☆」  
「そっか」

俺はそう言いながら、訓練場から去った

自室

「そういえば、アスクレピオスがいなかったな」

「そっちは最初から契約されてるよ☆」

全部の悪魔にそうしてくれればいいのに

「それじゃあ、仲魔のステータスを見るか」

俺はCOMPの仲魔にカーソルを合わせて、一体ずつ見ていく

幻魔 ヨシツネLv99

力40

魔15

体25

速40

物無

火耐

氷 |

風 |

雷無

魔耐

八艘跳び

チャージ

会心の予言

物理激化

猛反撃

双手

夢幻の具足

・「双手」通常攻撃が二回になる

魔人 アリスLv99

力26

魔35

体27

速27

物1

火耐

氷耐

風耐

雷耐

魔無

死んでくれる？

吸魔

ライフドレイン

至高の魔銃

双手

耐万能

異界の住人

・ 「至高の魔銃」 通常攻撃が万能属性になる

・ 「死んでくれる？」 ∴ 現在HP・MPの100%ダメージの万能属性全体攻撃。

・ 「ライフドレイン」 ∴ 範囲内のチーム全員に万能ダメージを与えてHPを吸収する。

・ 「異界の住民」 もう一度行動可能

妖精 ピクシーLv99

力21

魔40

体38

速40

メギドラオン

吸魔

常世の祈り

物理吸収

全問耐性

勝利の雄叫び

おまじない

医神 アスケレピオスLv99

物耐

炎無

氷反

風吸

雷弱

魔無

常世の祈り

サマリカーム

万魔の乱舞

勝利の雄叫び

勝利の美酒

勝利のチャクラ

医神

…どうしようこれ

DAY BEFORE 日常の終焉（非日常の始まり）2

AM 8:30

あ：ありのまま

今起こった事を話すぜ！

『俺は手に入れた仲魔のステータスを見たんだが全員のレベルが最大だった』

な：何を言っているのかわからねーと思うが

俺も何をされたのかわからなかった：

頭がどうにかなりそうだった：

催眠術だとか超スピードだとか

そんなチャチなもんじゃあ断じてねえ

もっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ：

とまあ、ポルポルパニツクをしたがマジでどうしようこれ…

みんな手加減出来るよね？民間人との戦いで間違えて頭パーンとか笑えないからな：

とりあえず、アリス呼んでおくか…アリスの機嫌が悪くなって、そこらへんの人に死んでくれる？とか吸魔されたらヤバイ。それにアリスなら普通の人間に見えなくもないから、アリスを連れて歩いても大丈夫だろ。

「召喚 アリス」

俺がそう言った瞬間、目の前にアリスが現れた。

「お兄ちゃん！すぐ呼んでって言ったのに！」

「ハハ。ごめん、ごめん」

アリスの頭を撫でる

「えへへ…そうだ、お兄ちゃん、お茶会しようよ！」

「お茶会？」

「うん！お茶会」

…仲魔たちの話を聞いたりして絆を深めるのも必要か

「…そうだな。やるか、お茶会」

「やった！」

「じゃあ、茶葉を買いに行くか。アリスも一緒に行くか？」

「行く！」

俺とアリスは買い物に行った。(ついでに仲魔たちの餌付け用のお菓子も)

AM 10:00

買い物も終わり、今はお茶を入れている。

(やり方はアリスに教わった)

「全員でてこい」

俺がそう言うとCOMPから仲魔が3体出て来る。

…ん？3体

「スンスン…何かいい匂いがする。ねえ、シン、この匂い何？」

「主殿、我らを呼んだ理由は？」

「…」

何か知らないのが混ざってるー!?

「最後の奴って、もしかして…」

「アスクレピオスだよ☆」

コイツが…

アスクレピオスの見た目は、人間に近い。真っ白のコートを羽織って、その下には黒い服を着ている。腰には薬(?)が入った瓶がある。髪は白い。人間そっくりだが、左腕を見たら人間ではないとわかる。アスクレピオスの左腕は白い蛇だった。

「お前がアスクレピオスか。俺は間雑 真 コンゴトモヨロシク」

「…」

「何か言えよ」

「(、△△△)ノ」

…ええ？

「よ、よろしく」

「○(≡▽≡)○」

コイツ直接脳内に…!?

「じ、じゃあみんな揃ったし、お茶会するか」

しばらくの間、仲魔たちと過ごした

PM 4:00

仲魔たちとお茶会したり、一緒に飯喰ったりした後

「そろそろ準備しなきゃな…みんな戻ってくれ」

「ん、わかった。お兄ちゃん、また遊んでね」

「シン、ちゃんと私を呼びなさいよ」

「ではまた」

「(・ω・)ノシ」

そう言っつて、仲魔たちはCOMPに戻っていった

「ティコ、COMPの電池の残りはいくらだ」

「あと94%はあるよ☆」

「よし、じゃあ準備をするか」

俺はクローゼットを開けて服を選ぶ

着るのは、フード付きのパーカー。あとジーンズ。そして狐のお面

(上半分だけの奴)と手袋(コスプレ用)。

これが、俺が情報屋活動する時の格好だ。

そして、鞆の中にCOMPと水を入れる。

「…よし。情報屋”マニアクス”銀狐のギン 準備完了つてね」

銀狐って言うのは、俺の二つ名だ。

多分、狐のお面と銀(情報屋としての偽名)を合わせただけの安易

なやつだ。

この格好にした理由は、カズヤたちに情報屋として会うためだ。何

故か俺の名は、ネットでそこそこ有名らしいので、それをネタにアツ

ロウと関係を築く。

そして、青山霊園で彼らに恩を売って、客としてきてもらう。

だから今から青山霊園に行つて…彼らを待つ。

ちよいと早いと思うだろうが、余った時間はCOMPでも遊びなが

ら待ってるぞ。

P M 7 : 0 0

待つこと約3時間（夕飯はカロリーメイトで済ませた）

三人組の影が青山霊園に入って行くのが見えた。

よし、俺は普通に霊園の前まで歩いて行く。

ドガアアアアアアアアア

キャーキャーキャー!?

ん、始まったか

俺は、まるで、爆発に驚いて走ってきたように装う

「今の音は何ですか!」

あ、ちなみに、この格好の時は喋り方と声を変えている

俺がそう叫ぶと、カズヤたちが振り向く

「…誰?」

「僕は銀と言います。それより何があつたんですか!」

「おい!アンタ、早く逃げろ!悪魔に襲われるぞ!」

「アツロウ、私達も早く逃げよう!」

ユズがそういうが、もう遅い

「これは…囲まれてますね」

「ちくしょう!やってやる!やってやるんだからな!」

「その人たち、ここは危険です!すぐに逃げなさい!」

「そんな事言われたって、この状況でどうしろってんだよ!」

(そのCOMPは…どうして彼らが…?)

「お、おい!何とか言ってくれよ!」

「仕方ありませんね。協力しましょう」

「ですが、ウエンディゴの相手は、今のあなたがたでは難しいでしょう。…私が相手をします、ギンさん、せめてあなただけでも逃げてください」

「僕は大丈夫ですよ。戦えますから」

俺はそう言いながらCOMPを起動する

「出番ですよ!ヨシツネ!ピクシー!」

「はい、シ…じゃなかった、ギン何時でも大丈夫よ!」

「ヨシツネここに見参」

「アンタも悪魔使いだったのか！」

「ピクシーは彼らのサポート、ヨシツネは僕と一緒に戦ってください  
…じゃあ、いきますよー！」

そう言った瞬間、俺とヨシツネは同時に飛び出し、ピクシーはカズ  
ヤたちの方に飛んでいく。

「ヨシツネは右のオーガを頼む。俺は左にいるコボルトを殺る」

「御意」

俺はコボルトの頭を掴み、地面に叩きつける

「グギャ!!？」

そして喉辺りを踏み潰す

「ガッ…」

頭がポーンと飛んでいった

「ヨシツネは終わりましたか？」

ヨシツネの方を見ると…

オーガが千切りになっていた

「…」

「終わりました、主殿」

「そ、そうですか」

俺たちが話していると

「グウツ…人間めが…。オマエたちの匂いは覚えた！」

絶対にこのままでは済まさぬぞー！」

そう言いウエンデイゴは逃げた

「逃がすわけには、いかない…。」

私はウエンデイゴを追います。これで、失礼。」

アマネは、ウエンデイゴを追いかけていった。

カズヤたちを見てみると、彼らはちゃんと戦っていたので俺は待つ

ことにした（あまり戦いすぎて彼らの経験値を取っちゃ悪いからな）  
ちなみにピクシーは彼らの回復をしている。

PM 9:30

しばらくするとカズヤは、最後の悪魔にトドメをさした  
ピクシーたちをCOMPに戻す

彼らはしばらく原作通りの会話をしていたが…

「ナオヤさんのメールにあった『これからの行動に影響を及ぼす人物』って、あの翔門会の子なのかな？」

「いや、もう一人いるだろ」

カズヤはそう言い俺の方を向いてきた。

じゃ、挨拶といきますか。

「皆さん大丈夫でしたか」

「あ、そういえばいたな」

忘れられてたのかよ…俺…

「一応、自己紹介といきましょうか。僕は銀 情報屋 マニアクス”  
の銀狐の銀と言われています。気軽にギンと読んでください」

カズヤたちも自己紹介してきた

「で、あなたたちは何故ここに…」

そう言いかけた所で

バツ

明かりが消えた

「何だ…街灯が、消えた…？」

「もう…！どうなってるのよ！」

「メールが当たったね」

「メールが…？あ…あああつ！それだ！」

「どうしたのよ、アツロウ？」

「…カズヤの言うとおりだ。これ、停電なんだよ！覚えてないか？

メールに書いてあった、3つ目の事件。…停電だよ、都内全域のな！」

「マジかよ…。都内全域かどうかまでは分かんねーけど、結局全部当

たっちまった…。」

「あの、すみませんが。メールって何の事ですか？」

実際は知ってるが、本来なら俺はラプラスメールについて知らない。だから聞かないといけない

「ラプラスメールだよ、改造COMPに届く未来の事が書いてあるメールだ」

「僕、結構前から改造COMPを使っていますが、ラプラスメールなんてメール一度もきたことありませんよ？」

「結構前から…？やっぱり悪魔は前からいたのかよ…」

「まあ、そうですね」

「やだっ！ケータイ、使えなくなってる！」

「え…？何でだよ？こんな場所で圏外なんてあるのか？」

「だって、ホントだしっ！この停電のせいかな？」

「ケータイの中継基地って、自家発電とか予備電源とかあるはずだろ？そんなのオカシーじゃんかよ！」

「そんなの知らないよっ！だけど、ケータイが使えないのは事実じゃない！」

「はあ…一時的なものだと、いいけどな。さすがに疲れたぜ…」

「ねえ、これからどうするの…？」

「ん、話しの途中失礼します。誰か来ますよ」

アマネが近づいてきた

「…ご無事でしたか。やはり…あなた方も、悪魔使いなのですね…」

「さっきの女の子か…!？」

カズヤたちとアマネは自己紹介をしたあと、俺の方を向いてきた

「僕は情報屋“マニアクス”の銀です」

「ギンさんですね、覚えておきましょう」

…ウエンディゴは自分の下僕たちをこの敷地内に放ったようです。付近に、簡単な結界を施して起きました。今夜はこの場を、動かぬ方が良いでしょう」

「げ…下僕…？…ってようするに悪魔の事!?動かない方がって…(こ、墓地だよ!?)」

「命を失うよりは良いと思いますが？ 明るくなるのを待って、ここを離れ駅へ向かいなさい。…私はこれで失礼します」

「ちよっ…おい！…ちくしよう、何なんだよ！」

「明るくなるまで、ここにいろつて…。ど、どうする…？」

「言われたとおりにしよう」

「クソ…選択肢なんてねーじゃんか。もしあの子の話が本当なら、今動くのは危険すぎる…」

「で、でも、ここ…お墓なんだよ…？ 大丈夫…かなあ…？」

「悪魔が来たら逃げよう」

「う…うん。どっちにしても動けないかも…腰が抜けて…」

「仕方ないな。交代で見張りに立とう」

「あ、僕は家に帰るので、これで」

「お、おい！ 危ないぞ！」

「大丈夫ですよ、僕、かなり強いので」

「だ、だけどな…」

「明日から僕は情報収集を開始します。もし知りたい事があつたら僕を探してください。有料ですが情報をお渡しします。」

「金とんのかよ…」

「商売ですから。あ、支払いはマツカでお願いします。それでは」

俺はヨシツネとピクシーを呼んで、ここから去る

「あつ、おい！」

アツロウが何か言うが、無視して帰宅する

P M 9 : 4 5

家についた

原作は始まった。悪魔と問題なく戦えた。チラつとだけど人間の死体を見ても大丈夫だった。明日から東京が封鎖される。準備は万端。

よし

生き残るか

あ、一応COMPでカズヤたちにメールしとくか（銀として）

1st DAY 東京封鎖 (2つの顔) 1

AM 8:30

「マスター☆起きて〜朝だよ〜☆」

机の上においておいたCOMPからの声で目を覚ます

「ファー…おはようティコ」

「おはよう☆マスター☆」

…暑い。

エアコンがつかない…夏にやるなんて悪魔も天使も政府も翔門会も阿保なんじゃねえか？

俺は物置に入れておいた冷えた水を取り出して飲む。

「ゴクツゴクツ…フウー…ティコ、俺は顔洗ってくるから俺が戻ってきたらみんなを呼んでくれ」

「わかったよ☆マスター☆」

俺が顔を洗い終えて戻ってくると仲魔たちが出迎えてくれた。

「おはよう、お兄ちゃん」

「おはよう、シン」

「おはようございます、主殿」

「+・(ノ\*・ω・)ノ\*・オハヨオオ☆。・:\*☆」

「ああ、みんなおは…今、アスクレピオス喋らかったか？」

「ブン(・ω・\*)(\*・ω・)ブン」

「喋ったよな!?!さっきオハヨオオって言ったよな!?!」

「フル(、ダ、o≡o、ダ、)フル」

しばらくの間俺とアスクレピオスの問答が続いた。

AM 9:00

「シン(お兄ちゃん)〜、まだ終わらないの〜?」

「主殿、何故我等を呼び出したのでしょうか」

「ハツ…すまん、熱くなつた。みんなを呼んだのは今日からこの時間は会議を行うことに決めた」

「会議ですか?」

「ああ、まあ会議と言ってもその日の行動指針を言う程度だ」

「つまりどういうことなの？シン」

「まあ、簡単に言うなら今日なにするかをみんなに言うだけだ…で昨日の茶会でも言ったけどもう一度言うぞ」

「シンの時とギンの時に使う仲魔だっけ？」

「ああ、それであってるぞ」

「えっとギンの時は私とヨシツネで…」

「お兄ちゃんがシンの時はアリスとアー君なんだよね」

「！（・ω・）」

「ああ、それであってる…で、ピクシー次は気をつけろよ」

「うん！大丈夫よシン」

不安だ

「で、今日やる事なんだが。ほとんどギンとして過ごす。一応シンとしてやる事も有るからみんなに出演があるぞ。で、今日絶対にやる事は2つ

1つ目は昼頃にあるハルのライブこれはギンとしていく

もう1つは17:00頃にハルを助ける手伝いをするこれはシンとしてだ」

「ほかにやることはないの？シン」

「あとは俺の…ギンの噂を流すくらいだ、ギンの情報は確実だとかそんな感じのやつ、まあこれをやるのは俺だからあまり気にしないでいい」

「うん、わかった！」

「じゃあ飯にするか」

「では我等はこれで」

「何言ってるんだ？お前らも食ってけよ」

「しかし…」

「いいから！これは命令だ」

「…わかりました」

「ハア…ヨシツネは難しく考えすぎなんだよ、ほかの奴らを見てみる」

ヨシツネほかの仲魔達に目を向ける

「やった!!ご飯だ!」

「お兄ちゃん、アリス紅茶が飲みたい!」

「ウワイイツY(Y(Y(Y(Y(Y(A。)))!!!

+。∴。、(、▽、)ノ。∴。+。」

「∴な?」

「∴はい」

「じゃあ、今から飯作るからお前ら待ってろ」

俺はそう言いながらコンロを取り出しながらキッチンに向かった

「あとアスクレピオス!お前やっぱ喋れるだろ!!ウワイイツって言うてるじゃあねえか!」

1st DAY 東京封鎖 (2つの顔) 2

AM11:00

今、俺は六本木にいる。格好は狐のお面にパーカー、つまりギンの姿だ。え？暑くないのかって？魔人化をすると暑さを感じなくなるんだ。ただ魔人化はある程度意識しないと発動しないため寝てる時は魔人化が解けてしまうのだ。

ハルのライブイベントは11時から12時までの間にありカズヤたちがいつ来るのかはわからない。だから先に来てライブを楽しんでいるのだ。

COMPの中にいる仲魔たちにもこの歌が聞こえるようでみんな楽しんでいる。

ちなみに少し時間が飛んでる時は大体情報収集をしている。情報は正確さと速さが大事だからな。後は悪魔退治などだ。さつきもここに来る前に少し悪魔を倒してきた。

まあ、とりあえずはライブを楽しむか。

AM11:30

しばらくの間ハルのライブを聞いていると、見たことがある女性が走ってきた。

「キヤアアアアア!!ハルウウウウ!!」

うん、もしかしなくてもユズである。

まあ、あと少しでライブも終わるだろうし終わったら話しかけるか。

ライブが終わった頃に俺は話しかけた。

「皆さん、元気ですか?」

「お前は…ギンか?」

「ええ、皆さんが無事で何よりです」

「何でここにいるんだよ」

「いえ、情報収集をしていたらハルの歌が聞こえて、休憩ついでにハルの歌を聴いて行こうと…ハルの歌っていいですよね」

「そうだよね！そうだよね！ハルの歌ってやっぱりいいよね！」

「そうだ、ギンは情報屋なんだよな？」

「はい、そうですよ何か知りたい事でも？」

「ああ、俺たち封鎖の外に出たいんだけど抜け道とか知らないか？」

「その情報は…10マツカで売りましょう」

「やつぱ金とんのかよ…て言うかどうやって払えばいいんだ？」

「COMPにはマツカや悪魔の受け渡し機能がありますのでそれを使ってください」

アツロウがCOMPを取り出して俺が言ってる受け渡し機能を探  
す

「受け渡し機能…これか？」

「はい、そのマツカの所を選択して渡す相手と金額を設定して、決定すればお支払いは完了します」

「10マツカだよな。意外と安いな」

俺のCOMPから機械音が鳴る（ちなみにティコではない）

「はい、確かに貰いました。では封鎖から出る方法ですが…」

「方法は？」

「ありません」

「え？」

「ありません」

「な、なんでだよ!?!」

「僕も今その抜け道を探しているんですよ。一応お金は貰っているの  
で言いますが僕が持っている東京の外の情報網やたまにくる政府の  
お偉いさんとのパイプも潰れてます」

「なんだって!?クソツ、俺達には時間が無いってのに…」

「時間：ああ余命ですか」

「テメエ、他人事だと思つて!!」

「まあ、少し落ち着いてください」

「…悪いついカツとなっちまった」

「まあ、余命がゼロならそれも仕方ないでしょう。そうですねアフ  
ターサービスとして少し情報をお渡しします、あなたたちのCOMP  
に届くラプラスメールを見せてください」

「あ、ああ わかった」

ラプラスメールを見せて貰う。

From：時の観測者

Subject：ラプラスメール

おハようございます。

本日のニュースをお伝えします。

①全日 東京 山手線内 全域 にて

停電 が 【継続】

復旧 は 不明

②全日 東京 山手線内 全域 にて

地下 から 【有毒ガス発生】 の 疑惑

駅施設 の 全て が封鎖

鉄道各線 全て運休

出口 は ナシ

③13時頃 千代田区 と 文京区にて

局地的 な 吹雪 の 発生

雪男 に よる 【殺人事件】

犠牲者 3名 【死亡】

それでハ皆様良い1日ヲ

うん、原作と変わりなし…つと

「うん、やっぱりありますね」

「ん？なにがだ？」

「3つ目のニュースですよ13時頃 千代田区 と 文京区にて

局地的な吹雪の発生

雪男による 殺人事件犠牲者 3名 死亡…のやつです」

「それがどうしたんだよ」

「三人組の余命ゼロの人たちをあなたたちは知ってるじゃないですか」

「それって…」

「俺たちか」

カズヤが答える

「な、なら13時頃、千代田区と文京区にいかなければいいんだよ！そうすれば私たちは死なないでしょ！」

「いえ、それではいけません」

「ど、どうしてよ!?!」

「おそらく雪男は昨晚青山霊園にいたウエンディゴでしょうあいつはこう言っていました

「オマエたちの匂いは覚えた！絶対にこのままでは済まさぬぞ！」

「ってだから逃げてもおそらく追いかけるでしょう。」

「じゃあどうすれば…」

「戦えばいいじゃないですか」

「た、戦うって…そんなの…」

「そうですね、あとは僕のスキルにアナライズと言うものがありました」

「それがどうしたんだ？」

「（自分が知ってる）相手の耐性がわかるスキルです」

「そんなのがあるのか!?!」

「ええ、でウエンディゴの弱点は炎ですこの情報をどう使うかはあなた達次第です、ではまた会いましょう」

「あつ、おい！」

アツロウがなにか言ってるが無視して俺は帰宅する。

アツロウ side

「なんなんだアイツは」

「一応、情報もくれたし私たちの味方…なのかな？」

「そういえばカズヤ、アイツの余命はいくつだった？」

「…」

「カズヤ？」

「…なかった」

「え？」

「余命なかった」

「オイオイ、まじかよ…」

本当に何者なんだアイツは…？

1st DAY 東京封鎖 (2つの顔) 3

PM 1:00

今、俺は家に居る。

ギンの格好からシンの格好に着替えた所だ。

さてと…

「なにしようかな…」

そう、今 俺は少し暇なのだ。

今朝の会議で言っていたハルを助ける戦い、このイベントが始まるのは午後5時頃、それまでの時間をどう過ごすか…

情報収集をしてもいいんだが、初日で集められる情報なんてたかが知れてる。

悪魔と戦ってもいいんだが、今はそんな気分じゃあない。

原作キャラとの接触？いきなり知らない奴が話しかけてきたら誰でも警戒するだろ？やるとしたらカズヤたちと一緒にパーティーになった時だ。

「ねえねえマスター☆」

「ん？どうしたんだ？ティコ」

「マスター自分の余命を見てないけどいいの？☆」

「そういえば自分の余命を確認してなかったな」

本来なら昨日確認するべきなんだが、仲魔たちのインパクトが強すぎてすっかり忘れていた。

「で、俺の余命は…」

俺は自分の頭上を確認した

「…あれ？…ない？」

この封鎖内にいる人間全員にあるはずの数字が俺にはなかった。

「…ティコ」

「なに？マスター☆」

「余命がないんだが」

「ないね☆」

「このCOMP壊れてるか？」

「壊れてないよ☆」

「…」

…やばくね？

俺の知る限り余命がないのは封鎖を守ってる自衛隊のみ

確か悪魔が人間に化けても余命はないへ3日目に天使の話をしてきた表参道の怪しい男とチャラ男<sup>キ</sup>。

俺が自衛隊に見えるか？いや見えない。

たとえ自衛隊に見えても封鎖内にいる時点でアウトである。

そういえば、カズヤたちにもなにも考えずに接触してしまった…

正体がバレる可能性がでてきやがった…

カズヤが余命がない人物（人外）に初めて会うのは3日目

それまでにか誤魔化さないと…絶対に5日目まで正体を隠してみせる。

とりあえず今朝の行動指針を変えずに誤魔化す方法考えなきゃ。

PM3:00

何も思いつかなかった。

PM3:30

仲魔を呼んで一緒に考えたが結局はどうにでもなれと言う結論になった。

バレたらバレたで好きにやればいいと仲魔たちに言われた、それができる力もあると。

まあ、こういう選択ができるのも力がある者の特権ってやつか。しばらくの間仲魔と共に過ごした。

PM4:30

そろそろ準備しないとな。

仲魔たちをCOMPに戻しておく。

物置の入口を作り出して幾つか物を取り出す。そして取り出した物を鞆に入れて…と

「準備完了」

COMPを手にとつて家を出る

じゃ、九段下へ向かうか。

PM 5:00

途中で悪魔と戦つたり、人の話を聞きながら武道館の近くに到着した。

「ん、ハルの歌か…」

武道館の方から歌が聞こえてきた。

俺は鞆からCOMPを取り出しながらハルの歌が聞こえる方へ向かった。

俺がついた頃にハルは悪魔に囲まれていた。

そして反対側にはカズヤたちが見える。ハルはシーケンサーのボタンをポチポチ押していたため、おそらく戦闘前の会話をしたあとだろう。

「電池切れ…か…はは…」

あー、これは…。やばい、かもよ。アヤさん…」

「ハルさん！早くっ！」

「あの人どうして逃げないんだよ!?!…クソっ！こっちから助けに行くしかない！」

「うん！早く行こう！」

「助けるのを手伝ってやる!!」

「なっ…!?!シン!?!逃げろ！」

俺はCOMPを起動しながらワイラに近づく。

「アリス！アスクレピオス！出番だ！」

アリスとアスクレピオスが俺の両脇に召喚される

「アリスは俺と一緒に悪魔と戦闘！アスクレピオスはハルの護衛だ！」

「わかった！」

「（…ω…）ゞ ビシッ」

「シン、お前も悪魔使いだっただのか!？」

「その話は後で！今は目の前の悪魔に集中する!!」

「わ、わかった」

俺はアリスに指示を出す

「俺はワイラを殺る！アリスはビルUISを殺れ！」

「どっち？」

「…青い方だ！」

「わかった！」

そう話しているうちにワイラの目の前まで迫った。

「吹っ飛べ…アイアンクロウ！」

俺は目の前にいるワイラを思いつき引きつけた。

ワイラは叫ぶ暇もなくバラバラになった。

…これ、一応初期に覚える技だし、気合いも使っていないはずなんだが…

「ねえ、死んでくれる？」

アリスがそう言ってるのが聞こえてそつちに目を向けると

大量のトランプの兵隊が槍を下に向けながらビルUISに落ちていた。

親方、空からトランプ兵が！

…なんて言ってる場合じゃねえ。

なんでエフエクトはペルソナなんだよ。

ビルヴィスはなすすべもなく消えていった。

他の悪魔はカズヤたちが相手をしている。

「無事か？」

「え、ああ……ありがと。でも、無理しなくていいよ。私なんかの為に身体張る必要無いって」

「ん、別に無理はしてないよ、アイツらなんて……」

後ろから飛んでくるモー・シヨボーを心眼で察知して回し蹴りで吹っ飛ばす

「見なくても倒せるから」

念のため、螺旋の蛇で追撃しておく。

「アンタホントに人間かい？」

「…一応人間のつもりだ」

カズヤたちが悪魔を倒すまで待った。

「ハルさん、無事でよかった」

…俺は？

「…どうも、ありがとう。アンタたち、悪魔が使えるんだね」

「え……ええ……でも私たちより、ハルさんの方が驚きですよ！あんなに、悪魔に囲まれて悲鳴の1つも上げないなんて……」

…だから俺は？俺には何の驚きもなかったのか？

「シーケンサーが使えれば1人でも大丈夫だったんだけど、あいにく電池が切れちゃってさ」

「どういう意味？」

「アンタたちも悪魔使いだろ？アタシと方法は違うみたいだけど。ア

タシはシーケンサーに合わせて歌うと、悪魔を呼び出せるんだ」

「えっ?!?ハルさんも悪魔を呼べるの!?!」

「それでさっき、シーケンサーを取り出していたのか…って事は、そのシーケンサーも、ナオヤさんガンガン作ったのか…?」

「ナオヤ…誰、それ?これはアタシの知り合いから借りてる。もう半年ほど前からね」

「知り合い?」

「そ、D—VA時代の先輩でさ、アヤさんっていう人からね…まあ、今は電池が切れちゃってるから、ちよつと動かないけど。でもやつぱり、持ってるのと落ち着くよ…」

「そういうものもあるね」

「あはは!話せるね、キミ」

「だけど、電池切れじゃ大変でしょ?すぐに電池を交換した方がいいっすよ!…あ、ちよつと端子を見せて!」

「…?ああ…どうぞ?」

「…クソ…やつぱりムリか。手動式の充電器が使えると思ったんだけどな」

「…ありがと、気を使ってくれたんだね。ま、動かなくてもさ?これは精神安定剤代わりになるから…」

「…?精神安定剤代わり…?」

「…あはは!深く考えんなって!」

「あ、ええ…それにしても、半年も前から悪魔を喚んでたなんて…大先輩っすよ!」

「いや、初めて喚んだのは1ヶ月半ほど前だよ」

「それでも大先輩ですよ!オレたち、昨日からだもん」

「昨日から?凄いな、たった2日であそこまでとは…それからさ…キミ、ちよつと転々と」

ハルは手招きをしてカズヤだけを呼び寄せた

俺には聞こえるけど聞こえないふりをしておく

「それじゃ、今日はありがと。アタシはもう行くから。また会えるといいね。あと、キミもありがとね。えっと…」

「間雑 真。シンって呼んでくれ」

「ああ、ありがとねシン」

そう言ってハルはこの場を去った

「まさか、あの人も悪魔を呼べるとはな…：やっぱり悪魔はオレたちが知るより前から、ずっと東京にいたんだ」

「…そうなるね。翔門会の人達なんて、ずっと前から悪魔を使っていた感じだし…」

「あ、そういえば、カズヤ！ハルの余命は!?前見た時0だったでしょ？」

「2に増えたよ」

「きやく！やった、やったのね！ハルの運命を救ったんだ！」

「そっかー！他人の余命も変える事が出来るんだ！これって凄くね？」

「スゴイに決まってるじゃない！ね、カズヤ？」

「封鎖内の余命を全部増やすぞ」

「…あ、そっか！6日っていう余命を、増やせるかもしれないよね！」  
「そうだな…：望みが出てきたぜ！…それにしてもさ、ハルはCOMPじゃなくて、楽器で悪魔を喚び出すんだろ？一体、どういう仕組みなんだ…：COMPとシーケンサーの共通点が悪魔召喚に必要な事、か？」

「また、すぐに考えこむっ！そんなこと、今はいいじゃん！ハルが助かったんだから、大満足だよ！…まあ助かってても、それほど嬉しそうじゃなかったのが、ちよつと気になるけどさ…：ロック歌手特有の冷めたポーズならいいんだけど…」

「それにしておかしい」

「…だよなあ」

「ところで、カズヤ。ハルと何を話してたの…？」

「別に…」

「ふくん…：内緒なんだ？あゝ、そう…」

「あの、先輩？誰か忘れてませんか？」

「あつ！シン！すっかり忘れてた」

やっぱり忘れられてたか…

「シンも封鎖に巻き込まれたのか…」

「いや、俺の家は山手線内だぜ？」

「シンの家って山手線の内なのか!？」

「いや、アツロウ先輩ウチにきたことあるだろ…」

「は、はは…すっかり忘れてた。そういえば、お前のCOMPってどこで手に入れたんだ？」

「ナオヤからもらった」

「え!? ナオヤさんにあつたのか？」

「ああ、封鎖されるより前にだけどな」

「そうか…」

「…そういえば、先輩たちって今日は泊まる場所は決まってるのか？」

「いや、特に決めてないぜ」

「…ウチにくるか？」

「…いいの(か)!？」

「あ、ああでも先に部屋とか掃除しておくから…そうだな7時頃にきてくれそれまでには終わらせる」

「ああ！ありがとうございます！」

「場所はアツロウ先輩が知ってるはずだから」

「ああ〇〇の〇〇〇号室だよな？」

「ああ、それであってる。じゃまたあとで」

俺はその場を去った

PM 5:35

我が家についた。

掃除しなきや。

PM 6:30

終わった。約1時間はかかったけど友人を招いても大丈夫なくらい綺麗になった…はず。

仲魔と一緒に時間を潰すか。

PM7:00

コンコン

アリスたちとお茶会をしていると入口のドアからノックの音が聞こえてきた。

「アリ：いやヨシツネでしてくれるか？」

「御意」

ヨシツネがドアを開ける

「だっ、誰だアンタは!？」

「アツロウ先輩、そいつは俺の仲魔だから気にしないでいいぞ」

「なに普通に悪魔を出してるんだよ!？」

「何時、何処で襲われるかわからないじゃねえか」

実際アマネルトの8日目にはCOMPを持たない一般人が悪魔使いを殺したっていう話もあったし。

「だ、だけどなあ…」

「まあ、とりあえず上がってくれ」

「お、おじやまします」

先輩たちが上がったのを確認してヨシツネにドアを閉めさせる。

「で、お前はなにしてるんだよ」

「なにつて…見ての通り茶会だが？」

「いや、なんで茶会なんかやってんだよ…」

「アリスがやりたいって言うから」

アリスはニコニコしている。

「まあ、それはいいとして先輩たちは夕飯は食べましたか？」

「いや、そもそも食べるもんがないんだよ」

「じゃ、俺がご馳走するよ」

「二いいの(か)！二」

「お、おう」

これには4黙っていたユズや普段無口なカズヤも一緒になって聞いてきた

「じゃ、今から作るから待っていてくれ。チャーハンでいいか？」

「ああ、大丈夫だ」

俺はカズヤたちに料理を振る舞った。

「「「「「ちそうさまでした」「」「」（——人——）」

「お粗末さま」

「うまかったな！」

「負けた…」

「どうした？ユズ先輩」

「ううん、なんでもない」

「もつと練習しなきゃ」とか聞こえるけどまあいいか。

「しかし、悪魔と一緒に飯を食うことになるとはなあ…」

「悪魔だって生き物なんだから差別したらダメだろ」

「だって、悪魔だぜ？」

「敵なら敵、味方なら味方っていう考えだからな、俺は。まあこの考え方がおかしいっていう自覚はあるから気にしないでくれ」

「そっか」

「じゃあ、俺は自分の部屋で寝るから布団は押入れの中にあるから好きに使っていいぞ」

「ああ、おやすみ」

「「おやすみ」」

「あ、俺の部屋には仲魔がいるから何か盗もうとか考えないでくれよ」  
「わかってるって」

「じゃあ、おやすみ」

俺はCOMPでカズヤにメールを出してから寝た。

## 番外編 未来の可能性の一つ「クリスマス」

20XX年12月24日

今日はクリスマス。

俺はあることをしていた。

それは…

「ふんふんふん、ふんふんふん」

「ねえ、シンまだできないの?」

「もう少しでできるよ」

「／(・ω・／)」

そう、ケーキを作っている。(歌っているのは、俺じゃなくて、アリスだからな)

東京封鎖の間にあった7日間。カズヤたちが選んだ道は悪魔を使つて生きる道だった。

まあ、簡単に言えばアツロウルトだな。

そのおかげで日常に悪魔がいるのが普通になった。

まあ、最初は一般人は悪魔を怖がっていたが、最近になってようやく受け入れられたらしく。大きな問題もおこらなくなった。

本来なら悪魔使いは政府に認められた者しか使えないが。

COMPを渡す時はナオヤから貰ったやつを、神から貰ったやつを物置に入れておいたためアリスやピクシーたちは俺と共に過ごしている。

「お兄ちゃん、できた?」

「ちよつと待ってる。イチゴを乗せてつと…よし、できたぞ」

「ほんとー!」

「○(≡▽≡)○」

俺がそう言うのと仲魔たちが集まってくる。

「わく、美味しそう!」

「すごい美味しそうだね!お兄ちゃん!よつち<sup>ヨシ</sup>ちゃんも一緒にくればよかったのに…」

「ああ、そうだな」

ヨシツネはこの場にはいない。

「こういうものは自分には合わない」

って言いながらCOMPに戻ってしまった。まあ、無理に参加させてもしょうがないからな。

「じゃあ、全員自分の席に座れよ」

「はいーい」「○(\*。▽。\*)○」

「全員席に着いたな、それじゃあ」

「二二いただきます」「。(人。)」

テーブルにはたくさん料理(全部手作り)があり、みんなそれぞれ好きなものを取っていく。

「アスクレピオス、あれとって」

「(・ω・)(ゞ ビシツ」

ピクシーは体が小さいためアスクレピオスに手伝ってもらっている。

「シン、そこにあるのをとってくれないか？」

「はいよ」

「ありがとう」

「あ、そこにあるやつを取ってくれ」

「わかったよ」

「ありがとうよ…で一つ聞いていいか？」

「なにかな？」

「なんでここにいるんだよ。閣下」

「おっと、ここにいる時はルイで頼むよ」

普段俺の右側の席はヨシツネの席なのだが、何故かルシファー(エルシャダイの姿)がいた。

「何、少し暇だったから遊びにきただけさ」

「前にルキフグスが閣下が仕事しないって愚痴言いにきたぞ」

最近、俺は魔界でも仕事をするようになった。

「はは、何の事かな。しかし、よく私だと気づいたねこの姿で会うのは

初めてのはず何だが」

「ルキフグスからアンタが変装する時の姿の写真集を渡されたからな」

「閣下がきたら教えてください…!!」

なんて涙目で言われた俺の気持ちにもなつてほしい。

「そうか、だけど君なら彼に言わないと信じているよ」

「俺はタダで仕事はしねえぞ」

「ところでシン」

「なんだ？」

「そんな装備で大丈夫か？」

「一番いいやつを頼む」

…っは、つい反省てきに

ルイは パチンと指を鳴らしなぜか難しい顔をしたあともう一回指を鳴らした

「君の物置に私からのプレゼントを入れておいた」

「物置に？つて勝手に使えるのかよ!?!」

「いや、送ろうとしたらなぜか入らなかつたため君のCOMPにいるティコを通じて送った。見てみたまえ、君ならきつと気に入るだろう」

俺は物置に届いたプレゼントをしてみる

デモニカスーツ×1

デビサバ2の主人公が着ていたウサミミパーカー×1

ペルソナ3の私立月光館学園の制服×1

ペルソナ4の八十神高校の制服×1

真女神転生4FINALに出てくるサムライ制服・改それぞれ×1  
一つずつ

「確かに嬉しいけどこれ幾つか俺の見た目と合わないんじゃないか

？」

「君がそういうと思ってもう一つ送っておいたよ」

「新しいアプリが届いたよ☆」

「なんのアプリだ？」

「アプリ名はアバターチェンジだよ☆これを使ったら24時間の間自分の姿を変えられるみたい☆」

「これが、私が出す依頼料だ」

「…OK、規約成立だ」

「では、楽しむとするか」

「このあとむちゃくちゃパーティーをした。」

あ、そういえばカズヤはユズと一緒に出かけたらしい。

チツ

2ND DAY 出口を求めて（人脈を求めて） 1

AM. 7:00

「マスター☆起きて〜☆」

「…ん、…ああ」

ティコが俺を起こす。

「おはよ☆マスター☆」

「ああ、おはよう」

俺は物音をたてずに洗面所に移動して、顔を洗い歯を磨いた。

…そういえば、カズヤたちって歯は磨いているのだろうか。

一応、新品の歯ブラシを物置から出しておくか。

そして、俺はカズヤたちを起こさないように、静かに自分の部屋に戻る。

「さてと、ティコみんなを召喚してくれ」

「わかったよ☆」

ティコがそう返事をしたあと、仲魔たちがでてきた。

「さて、みんな揃ってるな」

「大丈夫だよ！シン」

「じゃあ、今日の行動指針だが…「主殿」…ん？どうしたヨシツネ」

「私の姿を彼ら見せてよかったのですか？」

「ああ、そのことか。別に気にしないでもいいよ」

「しかし…」

「大丈夫だ、俺を信じろ」

「…わかりました」

…言えない、何も考えてないなんて言えるわけがない。

「じゃあ、改めて今日の行動指針だが…カズヤたちと一緒に行動する」

「？（…ω…）」

「何故、一緒に行動するかって？そうだな、簡単に言うなら知り合いを増やすためだ」

二日目はマリやショウジなど、まだ俺が知り会ってない人たちが出る。

特にショウジとのコネは欲しい。

彼女は封鎖について色々探っていたからな。もしかしたら、ゲームの頃になかった情報などがあるかもしれない。

それに、今日ならケイスケやミドリとも会えるし。

「というわけだ、もうみんなの事はバレてるから全員に出番があるぞ」

「わかったよ、お兄ちゃん」

「それじゃあ、全員一度COMPに戻ってくれ」

アリスたちがCOMPに戻ったのを確認して、俺は服を着替えた。

8時になったら飯を作るか。

それまでの間、俺はこの世界<sup>デビサバ</sup>についてまとめた手帳を読んだ。

流石に普通の人間なら15年前にやったゲームの内容などちゃんと覚えてないだろう。

だから、俺はこの世界がデビサバだとわかった日から覚えている限りのことをこの手帳に写した。

そのおかげで、今でもちゃんとゲームの内容を思い出せる。

まあ、そんなことはどうでもいいか。

AM・8:00

ん、時間か。

俺は手帳をしまつて台所へ向かう。

朝食はパンでいいよな？

台所についた。

俺は朝食を作り始める。

と言つてもカズヤたちがいる為、できるのは（フライパンで）焼いた食パンとサラダだけだが。

俺がパンを焼いていると、匂いで起きたのかカズヤたちがきた。

「おーい、シンなにしてんだ」

「ああ、朝飯を作ってたんだ。ちゃんと全員分あるぞ」

「マジか!？」

「ああ、だから顔を洗ってこいよ」

「おお、ありがとな。やっぱ、持つべきものは後輩だぜ！なつ、ソデコ」

「うん！そうだね…ってソデコってゆーな！」

アツロウたち三人は洗面所へ向かった。

「まだ、開けてない歯ブラシは使っていないからな！」

「わかった！」

さて、あとはサラダを盛り付ければ完了だな。

## 2ND DAY 出口を求めて（人脈を求めて） 2

AM 8:30

「「「「ちそうさま」「」「（一人）」」

「おさまっさん」

俺たちが朝食を食べ終わった頃に、ヘリコプターの音が聞こえてきた。

『一昨日の19時頃、青山霊園で発生致しました、爆発の原因は……』

その後の言葉は、俺は聞かなかった。

わざわざ、政府の考えた嘘の情報なんていらさないからな。

「いいなあ、ヘリコプターはよ……のんびり空なんか飛んで、オレたちをあざ笑ってる見たいだぜ……」

「そんな言い方しないのーそれにしてもさ、有毒ガスへの引火ね……」

「ああ……どこまでウソかは分からないけど、いよいよ政府を信用するわけにはいかなかったな……」

「どうしてだ？」

ギンとしての俺なら知っているが、シンとしての俺は知らないからこう言つとかないといけない。

「あつ、シンは知らないのか……あの爆発は翔門会が悪魔と戦つてたせいなんだ」

「翔門会が？」

「ああ」

「……ねえ、政府は悪魔の存在を知らないのかな？」

「それはないと思うぜ。ユズ先輩」

「俺もそう思う、あんだだけド派手なバリケードに、完全装備の自衛隊……オマケに24時間体制の監視だぜ？悪魔に備えてる以外、何がある？何もかも全部知っててわざと封鎖を解かないと思えねえよ……」

アツロウが言い終わった後にカズヤ、アツロウ、ユズのCOMPにメールが届いた

「おっ？今日のラプラスメールが来た見たいだぜ？」  
「ラプラスメール？」

「ああ、そっか俺たち以外には届かないのか…。」

From：時の観測者

Subject：ラプラスメール

おはようございます。

本日のニュースをお伝えします。

①17時頃 港区 芝公園 にて  
怪物 が【出現】

翔門会 の 活躍 で 犠牲者 ゼロ

②18時頃 豊島区 池袋 にて  
怪物 による 【死傷事件】

犠牲者 は 50名 以上

③全日 怪物 の 目撃 が 多数

【悪魔】と 暫定的 に 呼称

みなサマ良い1日■

「池袋に謎の怪物、死傷者50人…謎の怪物って…悪魔だよね？」

「そうだろうな。それにしても50人かよ…昨日より悪魔が増えてるからなのか、それとも、もっと強い悪魔が出現するのか…。」

「ねえ、カズヤ。私たちの余命って、どうなってる？」

「… 1だよ」

一瞬、俺を見た後にそう答えた

… やっぱ、俺余命ないのね…

「1つて事は、その池袋の事件に巻き込まれて死ぬ事はないよね…。」  
「安心できないよ」

「ああ、余命は絶対じゃないって、昨日、自分たちで証明しただろ？増やせるだけじゃなくて減るかも知れないんだから、油断は出来ないぜ？」

「う…そっか…」

「犠牲者50名以上…か。昨日で戦いにもだいぶ慣れた気がしたけど… やっぱビビるよな」

「まだまだ、悪魔の事なんて、何も知らないよね… 戦いに慣れても安心できないよ」

「余命は1日だからね」

「そうだよな…。ようやく雪男に勝ったっていうのに…、このまま明日になっちまったら、また同じ事の繰り返しだ… 俺たちの余命は明日まで、他の人は5日後… オレたちの世界って、一体、どうなっちまっただらうな？」

「ねえ… 明日までに、出口、見つかるかな？もうヤダよ… こんなの…」

「弱気になるなよ、ソデコ！オレは死にたくない。もし出られなければ、また3人で運命を変えたやるさー！」

「う… うん…。それでさ…これからどうする？今日もいろんな所を歩き回るの？」

「地上以外を探そうか」

「地上以外って…？さっきヘリコプターを見たからって何を言い出すのよ… でも、本当に空をとべたらこんな封鎖なんて、簡単に飛び越えられるのにな。」

「ん…？封鎖を飛び越える？あつ… 首都高！そうだよ！線路をまたぐ首都高を使ったらどうだ？うまくいけば抜けられるかも！」

「渋谷駅の隣を通ってるし、行ってみようか！」

「念のため行ってみるか」

「うん！何もしないよりマシだもんね！」

「シン、泊めてくれてありがとな。オレたちはもう行くから」

「俺も一緒に行ってもいいか？」

「え？何でだ？」

「俺は今日は特に予定は決めてないからな。だから連れていってくれ」

「ああ！シンがいてくれるなら心強いぜ！」  
「あ、でも明日はやる必要があるから別行動するけどな」

シンが仲間になった

## 2ND DAY 出口を求めて（人脈を求めて） 3

AM 9:00

首都高速渋谷出口へ差しかかると、ちょうど5〜6人の集団が首都高から降りて来るのが見えた

その先頭にはスーツを着た男がいる…。 ホンダさんか。

ホンダさんから首都高は封鎖されていると言われた。

COMPに興味があつたがカズヤが

「ヒマ潰しになります」と言ったら納得していた。

ホンダさんの反応を見る限り、COMPの見た目はまだ知らないようだ。

ホンダさんは名乗ってから立ち去つた。

アツロウとユズが少し話していたが、カズヤの

「情報を集めよう」と言う言葉でこの場から移動した。

AM 9:30

表参道で、アツロウとユズが少し休憩している間にカズヤがどこかに行った。休憩している2人には、自分が探しに行くと言って探しに来た。

少し探して、カズヤを見つけた。カズヤが見ている先に、ジンとカイドーが何か話しているのが見えた。

ジンと話すカイドーの手にはCOMPが握られている。

確か、この時にジンがナオヤがおいていったCOMPの正体に気がつくんだよな。

「カズヤ先輩、もう行くぜ」

「… わかった」

AM 10:00

渋谷駅のそばで、カイドーとホンダさんが話している。

話の内容は自分には聞こえていたが、他のみんなは聞こえていないらしく。

ホンダさんとカイドーが話しているのを驚いていた。

AM 10:30

歌舞伎町

トレーラーのコンテナだけが通りに放置され、そこに人が群がっている……

コンテナの中をのぞくと、食料品などの救援物資が入っている

周りの人に話を聞くと、自衛隊のヘリがコンテナを落として飛び去ったらしい。

アツロウとカズヤと俺は、急いで食料品を取りに向かった。(俺も行かないと怪しまれるからな)

「水と、固形食料。味気ないけどこれで明日いっばいは、OKだな」

「しかし、何で配給なのに配らずこんな檻にエサ放り込むような感じなんだ？」

「悪い予感がする」

「そうだよな、イヤな予感がプンプンするよ……」

「えっ？悪い予感って？」

「機能、山手線を封鎖した手際の良さ。警察じゃなく、自衛隊による警戒網。そして物資を放り込むだけの配給……」

「これ見ると、政府はすぐに俺達を助ける気がないのがわかるな」

「そんな……。じゃ、私たちどうなっちゃうの？」

「さて……とにかく、他を探してみようぜ」

カズヤは不安にさせないように黙ったか。

AM 11:00

神田駅前

神田を抜けようとした時、ビルの影で涼む女性を見かけた……。

「あれ？あの人は……」

アツロウは女性の方に近づいていった

「あら……？ひよっとしてアツロウ君？」

「やっぱり、マリ先生だ！お久しぶり！」

「久しぶりね、アツロウ君。元気だった？」

「元気、元気！元気があふれて困ってますよ！」

……夏休みずっとパソコンやってた奴が何言ってるんだよ。

「もう、あいかわらずね……」

「ねえ、ちょっと、アツロウ！アツロウのお知り合い？」

「おう、紹介するよ！この人は、中学時代に、家庭教師をしてもらったマリ先生だ」

「望月麻里です。よろしくね。今は、小学校の養護教諭やっています」

「えっ？それじゃ、保健室の先生になれたの？おめでとう！」

「はしやいでんなあ……アツロウ……」

「はしやいでるアツロウをよそ目に俺たちは自己紹介をすませた。」

「それにしても、停電はいつなおるのかしら？マンションだと水も出なくなるのよね」

「それで外に？」

「うん、そういう事。公園に行けば水もあるから」

「……俺だけ物置を使つてるとなんか罪悪感が湧いてくるな……」

「今日1日くらいなら耐えられるけど、これがしばらく続いたら、だんだん大変な事になるわ」

「体力のない子供や老人が倒れたり、ストレスで暴力に走る人が出てくるはずよ……これが本当に災害で悲惨な状況を目の当たりにしていたら、状況は別なだけどね……」

「別って、どうなるんですか？」

「悲惨な状況では、人間の秩序は保たれるものだけど、今回は違うわ。ただ閉じ込められて、不自由な生活を強いられているだけ。いずれストレスが秩序を壊すわよ……」

「……何で政府は山手線内の電気配給を止めたんだ？ネットや携帯の制限だけすればいいのに……超電磁結界だったわけ？それを使うための電気なら何時でも使えるようにしてるハズだし……」

「せめて、電気が回復して、日常生活に戻れば、ストレスは、山手線の外に出られないだけになるのに……一体、政府は何をしているのかしら……」

「物資コンテナはあったけど」

「一応、配給は来たのね……政府も、何とかしようとは考えているのかしら」

天使がバックにいる時点であ……政府はあまり役に立たない気

がするよ……

「こんな平穩は保って明日いっぱいね。明後日にはきつと……壊れるわ…… 1人が暴動を起こせば、負の感情は他の人にも伝染する…… とても危険な事よ」

「でも、もしそんな事が起こっても、君たちは冷静な判断をしてちょうだい。お願いよ？」

「はい」

「いいお返事で、よろしい！花マルをあげましょうね」

「それじゃ、みんなも気をつけてね」